

## 清里バイパス第1・2遺跡



1997・3

山梨県教育委員会  
山梨県道路公社

# 清里バイパス第1・2遺跡

## 序

本報告書は、主要地方道須玉・八ヶ岳公園線(清里バイパス)建設事業に先立ち発掘調査を行なった、山梨県北巨摩郡高根町清里地内の清里バイパス第1・第2遺跡の調査報告書であります。

道路建設事業ということですからかなり距離もあり、また周辺で遺跡の調査も少ないとことから、試掘調査を実施しながら、遺跡と思われる箇所の本調査を行なったところ、第1遺跡ではやせ尾根上に76基の陥し穴がつくられていたことが明らかにされました。

第1遺跡は、山梨県の北西部に位置する八ヶ岳山麓に存在し、広大な県有林の中の「清里の森」と称される箇所になります。その「清里の森」の地内に清里バイパス建設事業が計画されました。

昭和58年度から数年間に県林務部により、テニスコートなどのレクリエーション施設を有する別荘分譲地「清里の森」造成計画が実施されることとなり、文化財保護事業として国庫補助を受け、昭和58年度から昭和60年度まで、「清里の森」造成予定地200haにおよぶ大規模開発事業を三次にわたり調査が行われました。

その結果、陥し穴と縄文時代中期の住居跡が発見され、「清里の森第1遺跡」として報告されています。

今回の調査では、以上のようなことから遺構の存在はある程度予測されてはいたものの、陥し穴の总数76基の多数が発見されました。また周辺にも陥し穴の存在があるものと思われます。

陥し穴という性格上、遺物はほとんど期待されるものではありませんが、それでも表面採集遺物として土器片数点石錐1点が見つかり、おおよそではありますが陥し穴がつくられた時期は縄文時代中期頃と判断することができます。そして中世以降と考えられる陥し穴も見つかっております。

これらの陥し穴は、周辺で調査された数カ所のデータをもとに時期を検討しております。

清里バイパス第2遺跡は、第1遺跡の南西側に位置し、小海線沿いの山林部や牧草地に囲まれた地域に立地しております。第1遺跡同様、試掘調査によって確認された遺跡で、今回の調査に至っております。

今回の調査では、県内の北巨摩方面ではほとんど出土例のない縄文早期中頃の押型文期の土器片や、押型文期に伴う石錐などが出ています。土器片については、山形文・楕円文を中心として該期の帯状縄文施文土器など県内にあまり類例のない押型文期に伴う土器片が出土しています。石器については、押型文期の鋸形石錐や、縄文晚期の凹基有茎縫、石核や砾器、くぼみ石など検出されています。しかし、遺物についてはいずれも遺構には伴っておりません。このことは、第1区調査の東側に、人頭大の程の砾の流入が伺え、それと平行するように小さな沢状の落ち込みが砾と平行して検出され、さらに遺物も流路と平行した状況で分布しています。このことから、遺物が周辺の遺跡から流れ込んだものか、短期的に居住していたもののどちらかと思われ、清里地区の高標高地域特有の環境をいかした生活を第1遺跡同様営んでいたと思われます。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至るまで、多くの皆様方のご協力を頂いてきたところであります。特に調査にあたっては、高根町教育委員会を始めとして、地元の皆様方、財団法人キープ協会の力を借りました。そして、多くの関係機関・諸氏からご指導・ご協力を賜りましたことに対して、末筆ではありますが厚く御礼申し上げます。

1997年3月

山梨県埋蔵文化財センター  
所長 大塚 初重

## 例　言

1. 本報告書は、1996年度に主要地方道須玉・八ヶ岳公園線(清里バイパス)建設事業に伴って発掘調査された、山梨県北巨摩郡高根町清里バイパス第1遺跡・第2遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、山梨県道路公社から山梨県教育委員会が委託を受け、山梨県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 発掘調査および整理作業は、山梨県埋蔵文化財センターが行い、第1遺跡は同機関の山本茂樹・川手昌英が担当し、第2遺跡は同機関の坂本美夫・高野玄明・雨宮芳男・川手が担当した。
4. 本報告書の執筆・編集は、山本・川手・高野が行い、第2遺跡第3章第1節を小野正文、第2節を保坂康夫が行った。
5. 遺跡の写真撮影は、遺構を川手・高野が行った。また第1遺跡の航空撮影・測量は、(株)シン技術コンサルに委託した。
6. 本書にかかる出土品・記録図面・写真などは、一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

## 凡　例

1. 図版の縮尺は、陥し穴1/60・エレベーション図1/60・土層図1/40を基本とした。
2. 遺物は、杭の実測図1/2・拓本1/3及び1/2・石器等石器類は原寸である。

## 目　次

### 序

### 例言

### 清里バイパス第1遺跡

第1章　発掘調査経過	7
第1節　発掘調査に至る経緯	7
第2節　発掘調査の組織	7
第3節　調査の方法と経過	8
第2章　遺跡の位置と立地	8
第3章　陥し穴	13
第4章　遺物	40
第5章　まとめ	41

### 清里バイパス第2遺跡

第1章　発掘調査経過	45
第1節　発掘調査に至る経緯	45
第2節　発掘調査組織	45
第3節　調査の方法と経過	45
第2章　遺跡の位置と立地	45
第3章　遺物	48
第1節　出土土器	48
第2節　出土石器	48
第4章　まとめ	54

# 清里バイパス第1遺跡

## 第1章 発掘調査経過

### 第1節 発掘調査に至る経緯

山梨県の北西部に位置する八ヶ岳山麓には広大な県有林があり、清里の森と称されている。その清里の森地内に清里バイパス建設事業が計画され、山梨県道路公社から県学術文化課へ埋蔵文化財の有無の確認依頼がなされた。県埋蔵文化財センターでは、学術文化課より早急に試掘調査の実施を行うよう要請された。そこで事業に先立って平成8年(1996)3月4日から7日までの4日間にわたって試掘調査が行われた。試掘調査の対象面積は約90,000m<sup>2</sup>で、道路建設予定図に基づいた路線上に重機による試掘坑を設定し、その後人力によって精査を行い、遺構および遺物の有無について確認調査がなされ、建設予定地内に幅2m、長さ5~80mの試掘坑を26本設定して行われた。

その結果、表土から約50~70cmの深さまで、腐食土および黒褐色系の土層が確認され、この層の下にローム層および混土疊層の存在が明らかにされた。そして26本の試掘坑のうち2本から、隅丸長方形を呈する陥し穴が1基づつ発見されたことから、この周辺のやせ尾根状の台地を調査する運びとなった。発掘調査は平成6年(1994)4月24日から6月12日にかけて本調査が実施された。調査対象面積は約3,000m<sup>2</sup>のやせ尾根で、浅い谷が尾根の両脇に入り込んだ地形をなし、本調査区を挟む谷部特に北斜面部では、表土のすぐ下に疊層が形成されていることが確認され、本調査区に陥し穴が掘られたことも納得のいくところである。

清里の森およびその周辺では、昭和58年度(1983)から数年間に県林務部により、テニスコートなどのレクリエーション施設を有する別荘分譲地「清里の森」造成計画が実施されることになった。そのため遺跡分布調査が計画され、文化財保護事業として国庫補助を受け、昭和58年度(1983)から昭和60年度(1985)まで、三次にわたって行われた。清里の森造成予定地200haにおよぶ大規模開発事業である。

清里バイパス第1遺跡の北西約100m、標高約1317m地点から縄文時代中期の土器が発見されており、昭和60年度(1985)に土器群が出土した試掘坑を中心にして、その周辺の遺跡の広がりを確認する目的で調査が行われた。その結果、住居跡1軒と陥し穴2基が確認された。遺跡の名称は、小字名を用いるのが基本とするのであるが、本地域には小字名がないことより、「清里の森第1遺跡」(第1.2図)と付けられ報告されている。

#### 引用・参考文献

山梨県教育委員会『八ヶ岳東南麓遺跡分布調査報告書』山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第14集 1986

山梨県教育委員会『清里の森第1遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第32集 1987

山梨県教育委員会『丘の公園第5遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第56集 1990

### 第2節 発掘調査の組織

調査主体 山梨県教育委員会

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

調査担当者 山本茂樹・川手昌英(主任・文化財主事)

試掘担当者 野代幸和・田口明子・萩原孝一(以上文化財主事)、村松佳幸(非常勤嘱託)

調査参加者 千野あやめ、浅川たみこ、千野松代、浅川茂子、浅川保代、長田光枝、三井ちえの、堀川ふじ  
及び 整理員 高市雅司、戸島義和、山中敏夫、重川恵美子、奥石勉、八巻重子、秋山かつえ、窪田満子、渡辺早  
月、大柴富子、藤原かつみ、小尾ねのえ、中澤敏雄、石原はつ子、大森仁美  
協力機関 高根町教育委員会

### 第3節 調査の方法と経過

1995年3月4日から7日までの4日間の試掘調査において陥し穴が2基確認され、今回の本調査に至った。調査面積は約2,400m<sup>2</sup>であり、調査区全体が腐食土層に覆われ、厚いところでは80cm以上も堆積している箇所があった。その腐食層を重機とジョレンによって除去し、腐食土層の下にあるローム層を確認面とし、5mのグリッドを設定して調査を行った。

遺構は、試掘調査の際に発見された2基の陥し穴を含めて、全部で76基の陥し穴を発見し調査を行った。その内の2基の陥し穴からは、杭の基部と考えられる木片3点が、坑底部の小ピットより出土した。また、坑底部の小ピットの断面の写真撮影のために、陥し穴の半裁作業を行った際、ローム層上部より約40cm下のソフトローム層内から、黒曜石製石核、および剥片がそれぞれ1点づつ出土した。このことにより、すでに八ヶ岳山麓の長野県・山梨県にまたがって存在が確認されている旧石器時代の石器群の一部である可能性を考慮して、石核、剥片の発見箇所を中心として広範囲にわたってローム層を掘り下げるとともに、さらに縦横1.5m、深さ40cm前後(ハードローム層まで)の試掘坑を23ヶ所設定し調査を行ったが、新たな石器は発見されなかった。

尚、遺構の実測等は、ラジコンヘリによる空中測量を行った。

調査期間は、1996年4月24日から同年6月12日迄である。

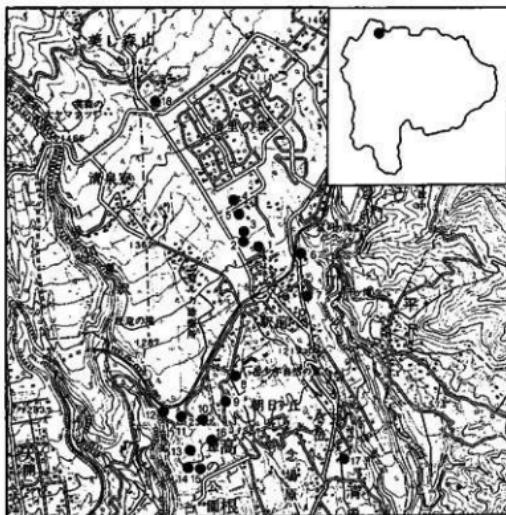
### 第2章 遺跡の位置と立地

本遺跡は、山梨県の北西部、八ヶ岳東南麓の通称“念場原”と呼ばれる大地上の「清里の森」地内に位置し、標高1,308m前後を測る。念場原は、東を大門川、西を川俣川の深い谷によって切られる東西2.5km、南北5kmほどの台地上の土地で、八ヶ岳の広大な裾野の一部を構成する。

「清里の森」は、テニスコート、美術館などのレクリエーション施設を有する森林内の別荘分譲地であり、その範囲は200haにも及ぶ。また今回の発掘調査は、「清里の森」を横断する主要地方道須玉・八ヶ岳公園線の建設に伴うものである。

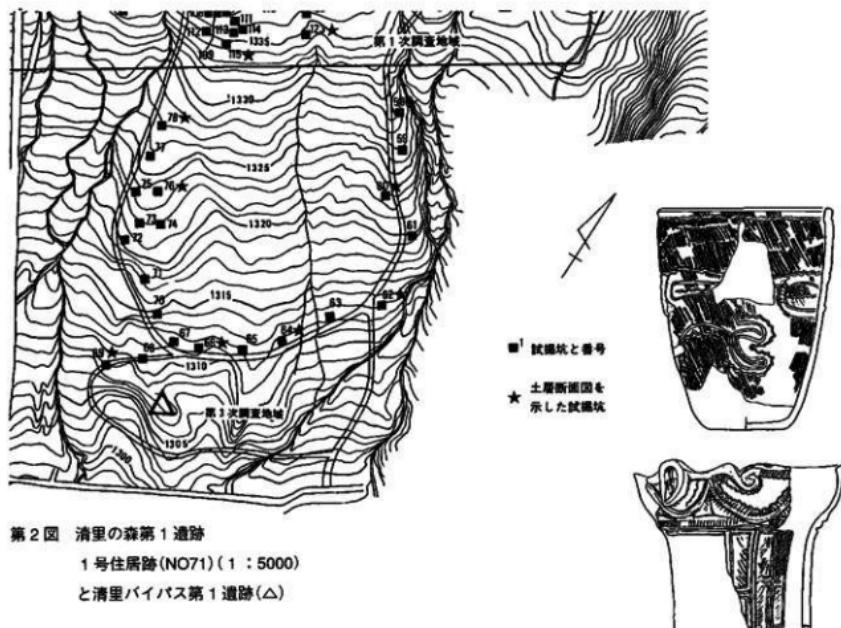
この「清里の森」を含めた念場原という広大で平坦な地域は、標高1,000m~1,300mほどの高冷地であり、ゆるやかな傾斜を持ちながら南へ延び、表土から礫層まで厚く堆積している。念場原は本来県有林で、いわゆる恩賜林である。近世には御用林でもあった。したがって、字切図の中にも字名のない空白の地となっていた。また念場原は、平安時代の甲斐国三御牧の一つ柏前牧の比定地(磯貝・飯田「山梨県の歴史」1973)であり、「甲斐国志」の記述によれば中世に念場千軒と称され栄えたといふ。

このような地域なので、埋蔵文化財の存否が全く不明であった。しかし、清里地域では、縄文時代の土器や石器をはじめとする遺物が広域的に表採されており、いくつかの遺跡の存在が知られていた。また、旧石器時代の遺跡集中地として名高い長野県野辺山原とも隣接し、地形や標高等が近似することから、同時代の遺跡の存在も予想されたが、今回の調査では確認されなかった。



第1図 遺跡分布図(1:25000)

- 1.清里バイパス第1遺跡
  - 2.清里の森第1遺跡
  - 3.清里の森第2遺跡
  - 4.清里の森第3遺跡
  - 5.清里の森第4遺跡
  - 6.念場原A遺跡
  - 7.念場原B遺跡
  - 8.朝日ヶ丘A遺跡
  - 9.朝日ヶ丘B遺跡
  - 10.丘の公園第6遺跡
  - 11.丘の公園第1遺跡
  - 12.丘の公園第7遺跡
  - 13.丘の公園第2遺跡
  - 14.丘の公園第4遺跡
  - 15.丘の公園第3遺跡
  - 16.丘の公園第5遺跡
  - 17.念場原F遺跡
  - 18.からまつ湖遺跡

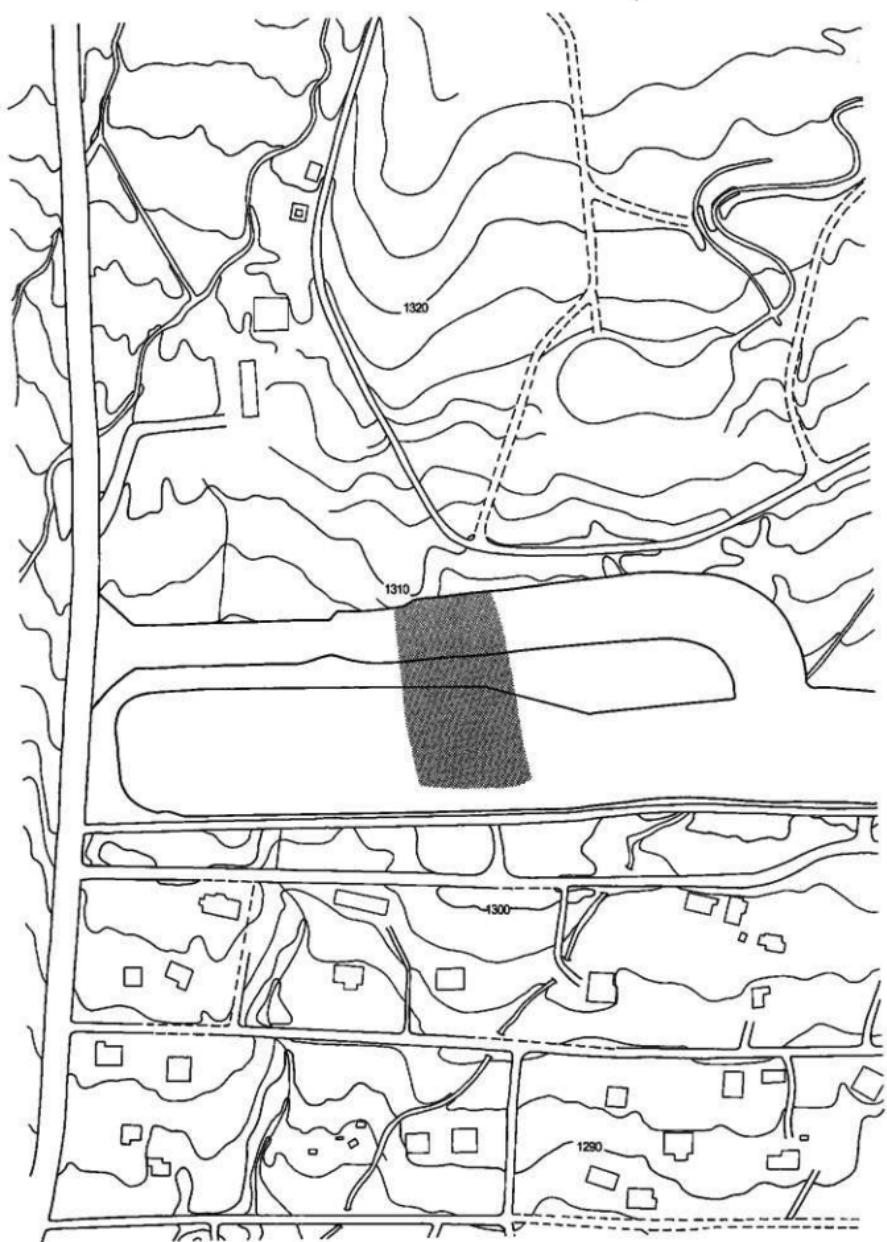


第2図 清里の森第1遺跡

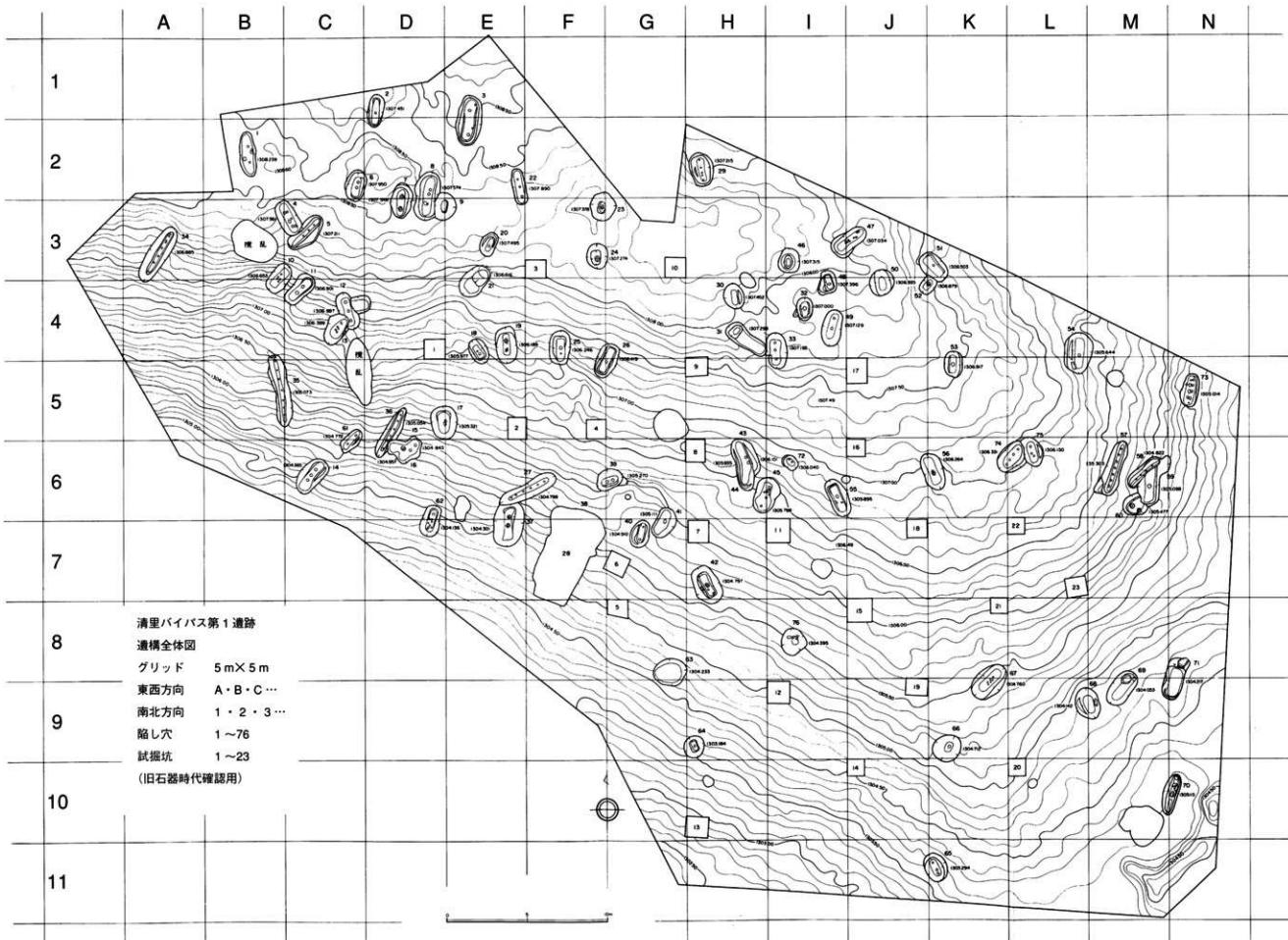
1号住居跡(N071)(1:5000)

と清里バイパス第1遺跡(△)

1号住居跡 出土遺物(1/3)



第3図 遺跡の地形とバイパス建設予定地(1:2000)



第4図 清里バイパス第1遺跡全体図

### 第3章 陥し穴

#### 2号陥し穴(PL 2)

位置 D-1・2グリッド

形態 長楕円形

規模 201×90×85

床面 長方形

壁 直に立ち上がる。

備考 斜面に対しほぼ45度で、長軸は南北にある。



PL 2 2号陥し穴

#### 3号陥し穴(PL 3)

位置 E-1・2グリッド

形態 長楕円形

規模 313×152×78

床面 長楕円形

壁 ほぼ直に立ち上がる。

備考 長軸はほぼ南北にある。



PL 3 3号陥し穴

#### 4号陥し穴(PL 4)

位置 B・C-3グリッド

形態 長方形

規模 230×110×70

床面 長方形

壁 立ち上がりは直に近い。

備考 斜面に対し、ほぼ45度傾く。

5号と重複する。



PL 4 4号陥し穴

#### 5号陥し穴(PL 5)

位置 C-3グリッド

形態 長楕円形

規模 270×130×100

床面 長方形

壁 直に立ち上がる。

備考 4号より新しい。

#### 10号陥し穴(PL 6)

位置 B・C-3・4グリッド

形態 長方形

規模 193×114×82

床面 長方形

壁 直に近い。

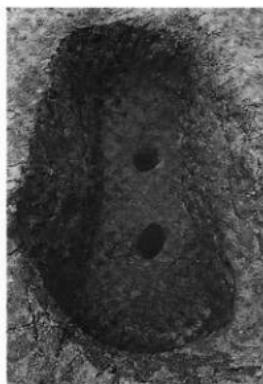
備考 斜面に対し、ほぼ直角。



PL 5 5陥し穴



PL 6 10号陥し穴



PL 7 11号陥し穴

11号陥し穴(PL 7)

位 置 C-3・4グリッド  
形 態 長楕円形  
規 模 222×106×63  
床 面 長方形  
壁 南では、緩やかに立ち上がる。  
備 考 10号と平行し、斜面にはほぼ直角。



PL 8 6号陥し穴

8号陥し穴(PL 9)

位 置 D-2・3グリッド  
形 態 長楕円形  
規 模 298×147×100  
床 面 長方形  
壁 ほぼ直に立ち上がる。  
備 考 7号に平行する。

6号陥し穴(PL 8)

位 置 C-2グリッド  
形 態 長方形  
規 模 192×120×71  
床 面 長方形  
壁 ほぼ直に立ち上がる。  
備 考 長軸はほぼ南北にある。



PL 9 8号陥し穴



PL10 7号陥し穴

7号陥し穴(PL10)

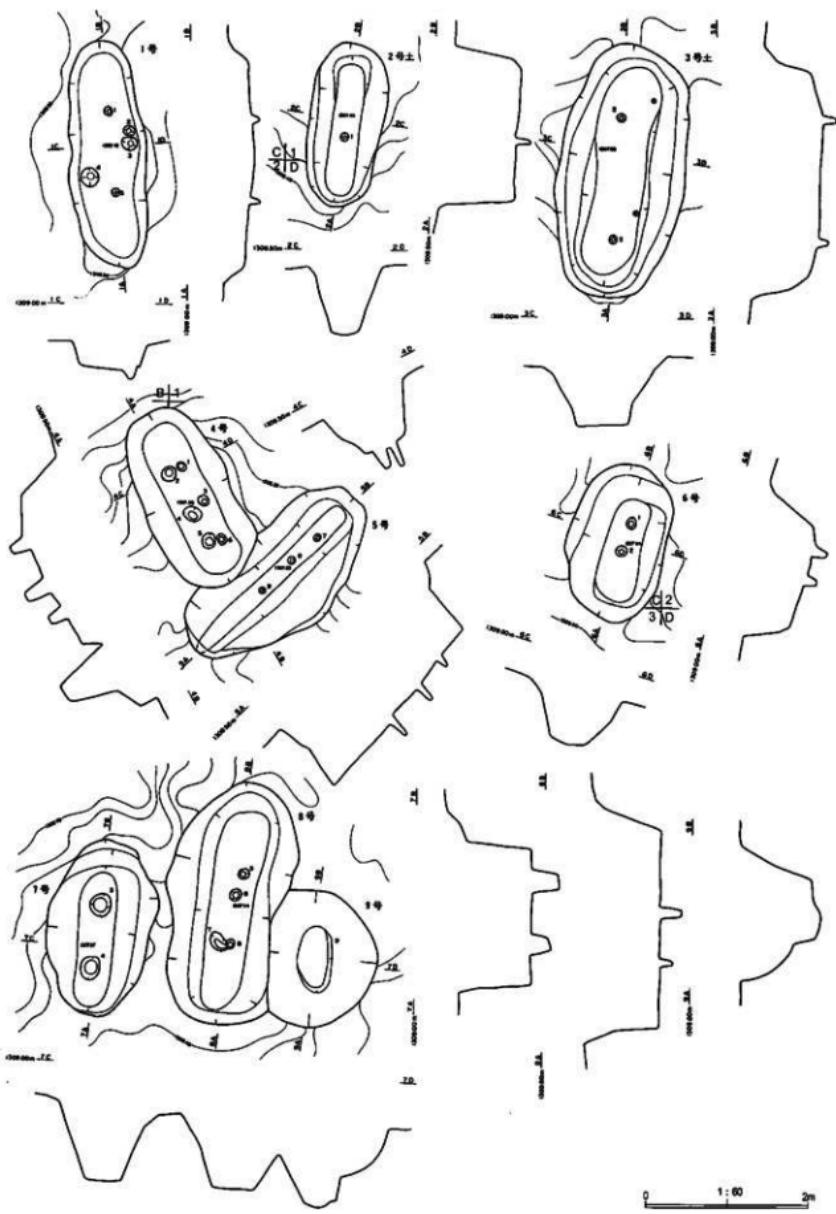
位 置 D-2・3グリッド  
形 態 長方形  
規 模 216×124×98  
床 面 長方形  
壁 直に立ち上がる。  
備 考 長軸を南北にとる。



PL11 9号陥し穴

9号陥し穴(PL11)

位 置 D-E-2・3グリッド  
形 態 円形  
規 模 約167前後  
床 面 楕円形  
壁 ほぼ直に立ち上がる。  
備 考 8号と重複し、9号のほうが旧い。



第5図 脇し穴実測図



PL12 12号陥し穴

12号陥し穴(PL12)

位 置 C-4 グリッド

形 態 長方形

規 模 236×101×50

床 面 不整長方形

壁 ほぼ直に立ち上がる。

備 考 13号と重複する。12号のほうが新しい。

斜面に対し、約30度傾く。



PL13 13号陥し穴

13号陥し穴(PL13)

位 置 C-4 グリッド

形 態 楕円形

規 模 197×107×80

床 面 楕円形

壁 ほぼ直に立ち上がる。

備 考 斜面に対して、ほぼ直交する。



PL14 61号陥し穴

61号陥し穴(PL14)

位 置 C-5・6 グリッド

形 態 長方形

規 模 161×89×78

床 面 長方形

壁 直に立ち上がる。

備 考 斜面に対して、ほぼ直交する。

14号の延長線上につくられる。



PL15 14号陥し穴

14号陥し穴(PL15)

位 置 C-6 グリッド

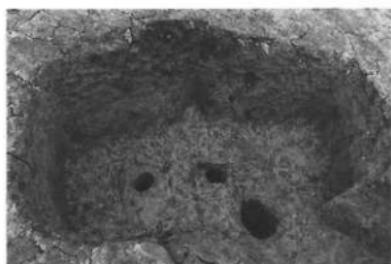
形 態 長方形

規 模 241×133×73

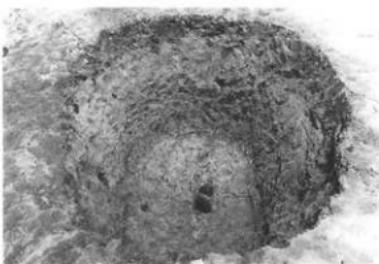
床 面 長方形

壁 直に立ち上がる。

備 考 斜面に対して、ほぼ直交する。



PL16 15号陥し穴



PL17 17号陥し穴



PL18 36号陥し穴



PL19 16号陥し穴

#### 15号陥し穴(PL16)

位置 D-6 グリッド  
形態 長方形  
規模 184×100×96  
床面 長方形を呈する。  
壁 直に立ち上がる。  
備考 16号と重複し、斜面に対して約45度で交わる。

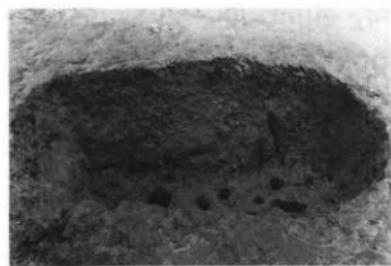
#### 17号陥し穴(PL17)

位置 D・E-5 グリッド  
形態 楕円形  
規模 195×165×70  
床面 楕円形を呈する。  
壁 緩やかに立ち上がる。  
備考 長軸は、等高線に対して直角に交わる。

**36号陥し穴(PL18)**  
位置 D-5・6 グリッド  
形態 長椭円形  
規模 349×88×77  
床面 長椭円形  
壁 ほぼ直に立ち上がる。  
備考 斜面に対して、約45度で交わる。

#### 16号陥し穴(PL19)

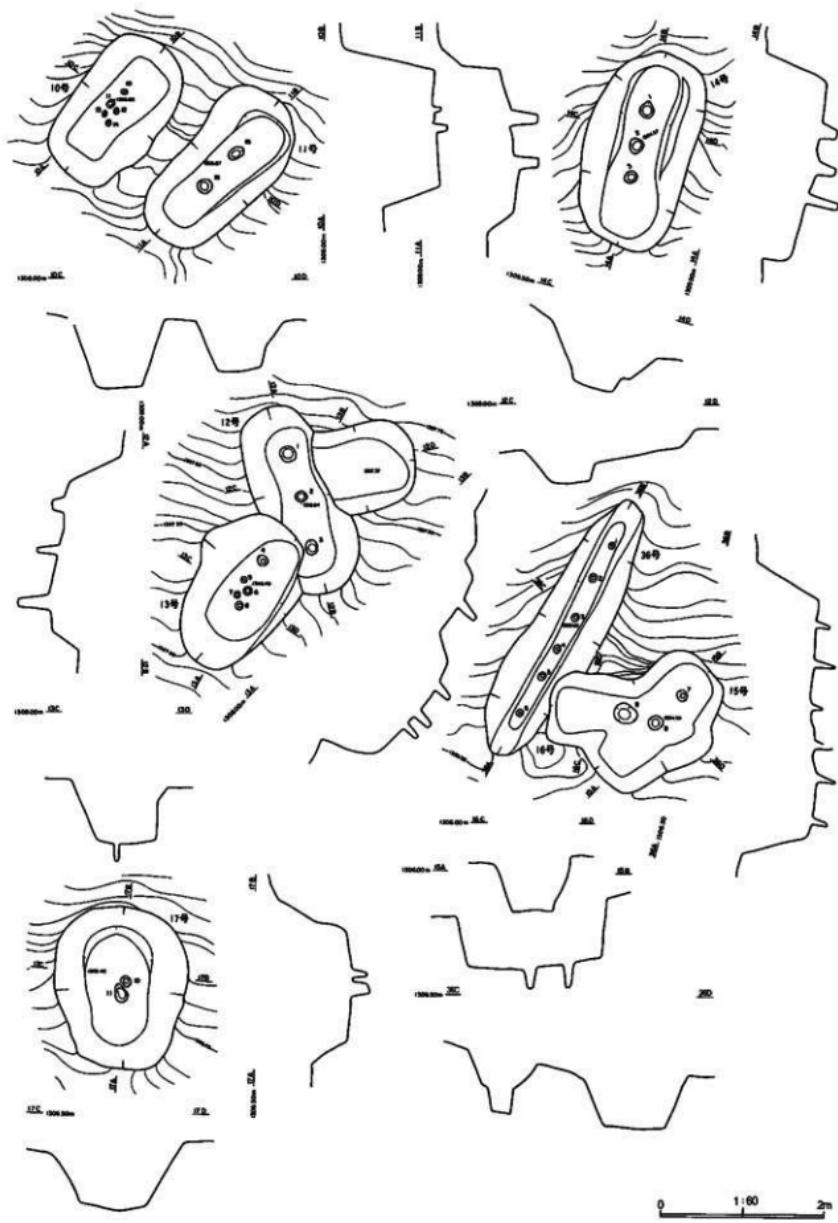
位置 D-6 グリッド  
形態 長方形  
規模 204×71×66  
床面 長方形を呈する。  
壁 ほぼ直に立ち上がる。  
備考 15号と重複する。等高線にはほぼ平行する。



PL20 62号陥し穴

#### 62号陥し穴(PL20)

位置 D-6・7 グリッド  
形態 楕円形  
規模 196×108×73  
床面 楕円形を呈する。  
壁 ほぼ直に立ち上がる。  
備考 斜面に対して、ほぼ直交する。



第6図 跖し穴実測図(1:60)



PL21 19号陥し穴



PL22 19号陥し穴



PL23 26号陥し穴

**19号陥し穴(PL21・22)**

位置 E-4 グリッド  
形態 長方形  
規模 221×123×106  
床面 長方形  
壁 ほぼ直に立ち上がる。  
備考 長軸は南北にある。

**26号陥し穴(PL23)**

位置 F・G-4・5 グリッド  
形態 長方形  
規模 220×120×88  
床面 長方形  
壁 直に立ち上がる。  
備考 斜面に対して、直交する。



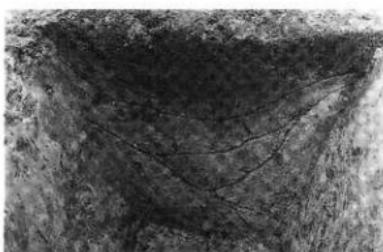
PL24 25号陥し穴

**25号陥し穴(PL24・25)**

位置 F-4 グリッド  
形態 長方形  
規模 205×123×97  
床面 長方形  
壁 直に立ち上がる。  
備考 長軸は、南北にとる。

**18号陥し穴(PL26)**

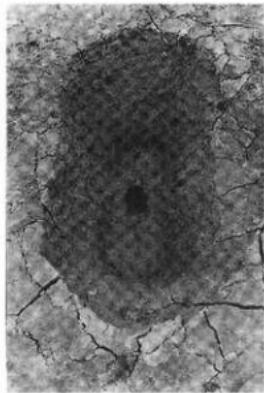
位置 E-4 グリッド  
形態 長方形  
規模 164×105×97  
床面 長方形  
壁 ほぼ直に立ち上がる。  
備考 斜面に対して、ほぼ30度傾く。



PL25 25号陥し穴



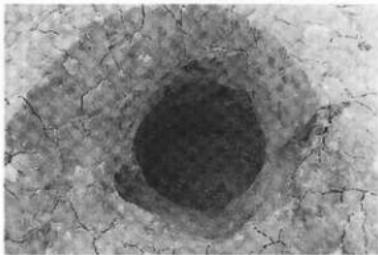
PL26 18号陥し穴



PL27 20号陥し穴

20号陥し穴(PL27)

位置 E-3 グリッド  
形態 長方形  
規模 153×101×65  
床面 長方形  
壁 直に近い。  
備考 斜面に対してほぼ45度傾く。



PL28 21号陥し穴

21号陥し穴(PL28)

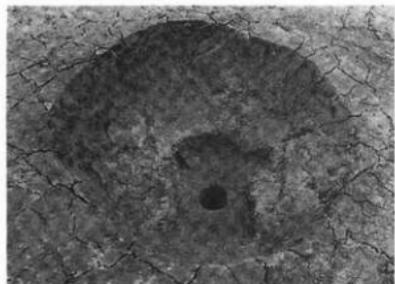
位置 E-3・4 グリッド  
形態 楕円形  
規模 217×108×120  
床面 楕円形  
壁 北側では、袋状を呈する。  
備考 斜面に対してほぼ45度傾く。



PL29 22号陥し穴

22号陥し穴(PL29)

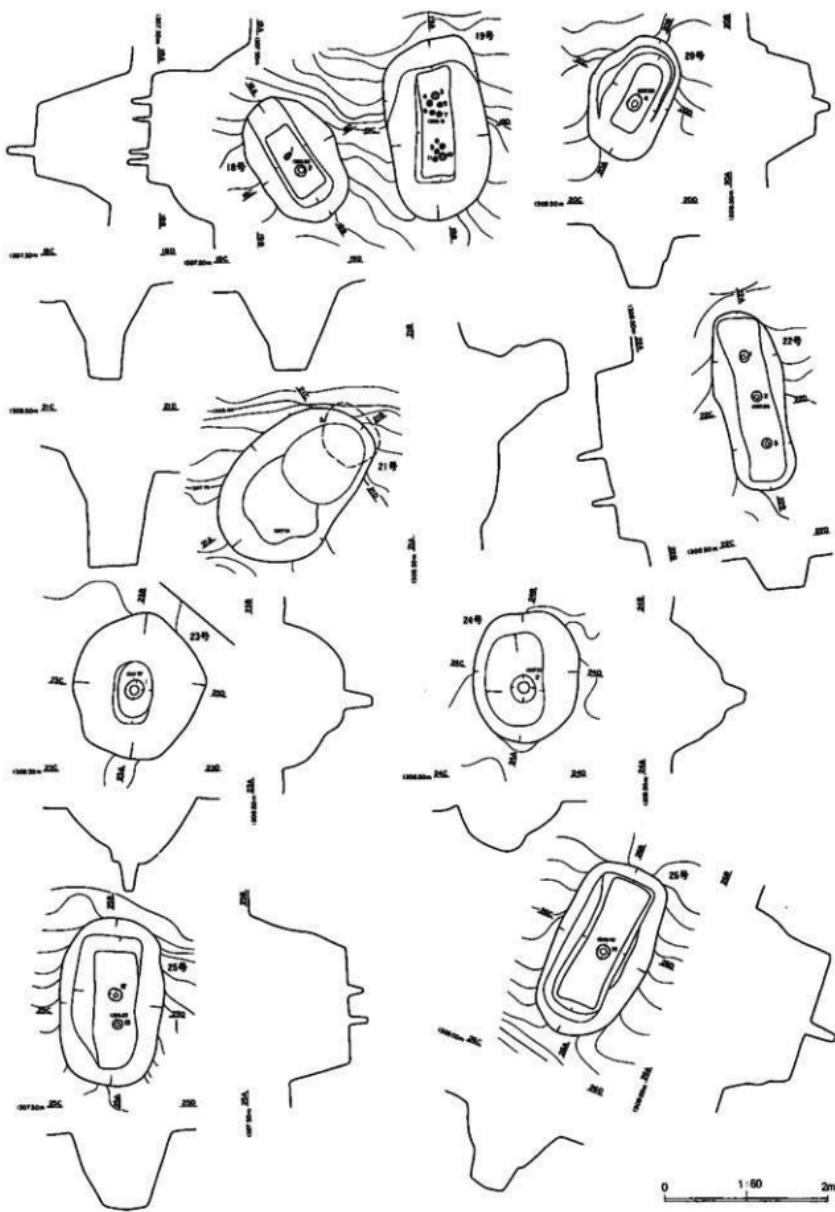
位置 E・F-2・3 グリッド  
形態 長方形  
規模 221×75×36  
床面 長方形  
壁 直に近い。タライ状を呈する。  
備考 浅い陥し穴である。



PL30 23号陥し穴

23号陥し穴(PL30)

位置 F・G-2・3 グリッド  
形態 不整円形  
規模 176×157×72  
床面 楕円形  
壁 丸く立ち上がる。  
備考 比較的平坦地につくられる。



第7図 脱し穴変測図(1:60)



PL32 27号陥し穴



PL33 28号陥し穴

27号陥し穴(PL32)

位置 E・F-6グリッド  
形態 長楕円形  
規模 388×100×100  
床面 細長い楕円形  
壁面 直に近い。  
備考 斜面に対してもば45度傾く。

28号陥し穴(PL33)

位置 E-7グリッド  
形態 長楕円形  
規模 340×100×80  
床面 細長い楕円形  
壁面 ほぼ45度で立ち上がる。  
備考 38号と重複し、斜面に直交する。



PL34 37号陥し穴



PL35 38号陥し穴

37号陥し穴(PL34)

位置 E-6・7グリッド  
形態 楕円形  
規模 290×187×100  
床面 長方形  
壁面 ほぼ45度で立ち上がる。  
備考 長軸は南北にある。27号に壊される。

38号陥し穴(PL35)

位置 F-7グリッド  
形態 楕円形  
規模 226×137×62  
床面 長方形  
壁面 ほぼ直に立ち上がる。  
備考 28号に壊され、37号と併設する。



PL37 30号陥し穴

30号陥し穴(PL37)

位置 H-4 グリッド

形態 楕円形

規模 159×122×68

床面 長方形

壁 ほぼ45度で立ち上がる。

備考 長軸はほぼ南北にある。



PL38 31号陥し穴



PL39 32号陥し穴

31号陥し穴(PL38)

位置 H-4 グリッド

形態 長方形

規模 280×93×43

床面 長方形

壁 ほぼ直に立ち上がる。

備考 斜面に直交する。



PL40 46号陥し穴



PL41 33号陥し穴

33号陥し穴(PL41)

位置 I-4・5 グリッド

形態 長方形

規模 223×128×54

床面 ほぼ長方形を呈する。

壁 立ち上がりは、直に近い。

備考 長軸は南北にある。

46号陥し穴(PL40)

位置 I-3 グリッド

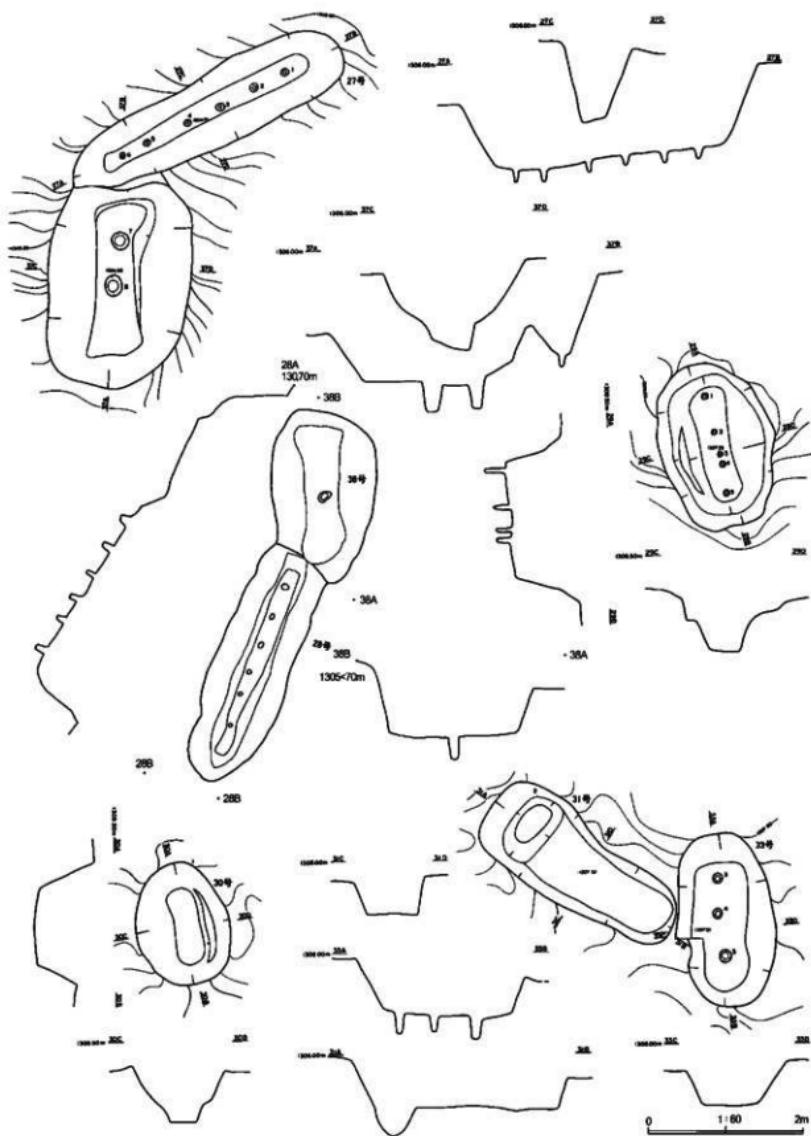
形態 不整円形

規模 148×135×77

床面 楕円形

壁 直に近い。

備考 長軸は、ほぼ南北にある。



第8図 脱し穴実測図(1:60)



PL42 48号陷し穴

48号陷し穴(PL42)

位 置 I-3・4 グリッド

形 態 長方形

規 模 136×121×48

床 面 長方形

壁 直に近い。

備 考 長軸は、ほぼ南北にある。

49号陷し穴(PL43)

位 置 I-4 グリッド

形 態 長方形

規 模 229×117×68

床 面 長方形

壁 南側では、緩やかに立ち上がる。

備 考 長軸は、南北にある。



PL43 49号陷し穴



PL44 34号陷し穴

34号陷し穴(PL44)

位 置 A-3 グリッド

形 態 長楕円形

規 模 384×125×92

床 面 細長い楕円形

壁 ほぼ直に立ち上がる。

備 考 斜面に対して、直交する。



PL45 35号陷し穴

35号陷し穴(PL45)

位 置 B・C-5 グリッド

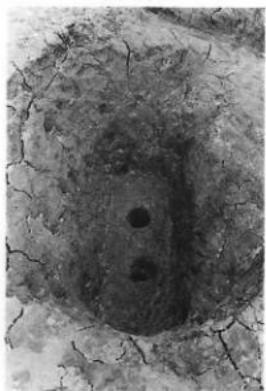
形 態 長楕円形

規 模 445×90×110

床 面 細長い楕円形

壁 北側では、横に延びる施設が存在する。

備 考 長軸は、ほぼ南北にある。



PL46 39号陥し穴

39号陥し穴(PL46)

位 置 F・G-6 グリッド  
形 態 長方形  
規 模 169×120×73  
床 面 長方形  
壁 ほぼ直に立ち上がる。  
備 考 斜面に対して、ほぼ平行する。

40号陥し穴(PL47)

位 置 G-7 グリッド  
形 態 楕円形  
規 模 169×115×74  
床 面 楕円形  
壁 ほぼ直に近い。  
備 考 斜面に対して、ほぼ直交する。



PL47 40号陥し穴



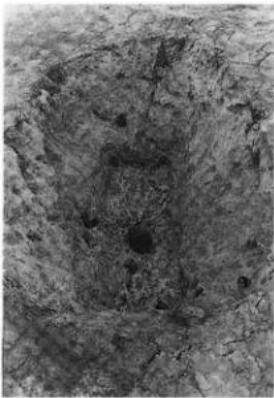
PL48 41号陥し穴

41号陥し穴(PL48)

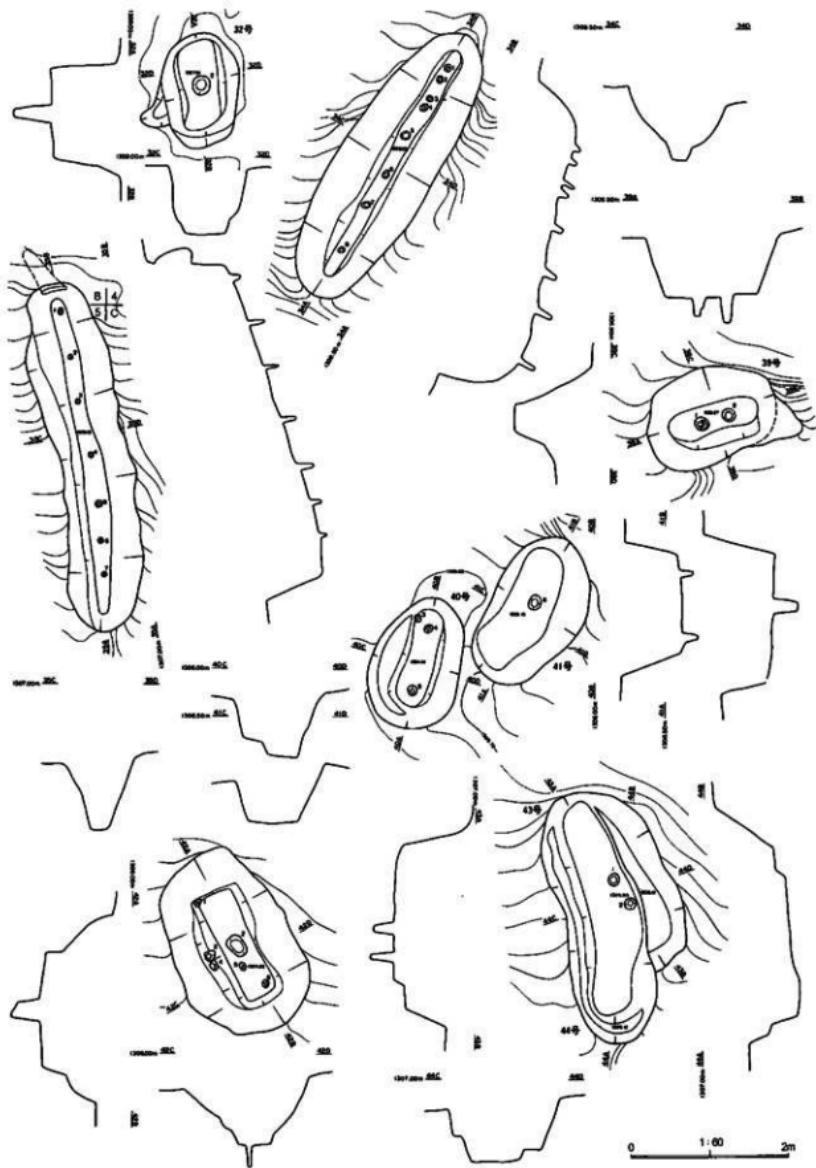
位 置 G-6・7 グリッド  
形 態 楕円形  
規 模 203×112×52  
床 面 不整椭円形  
壁 ほぼ直に近い。  
備 考 斜面に対して、ほぼ直交する。

42号陥し穴(PL49)

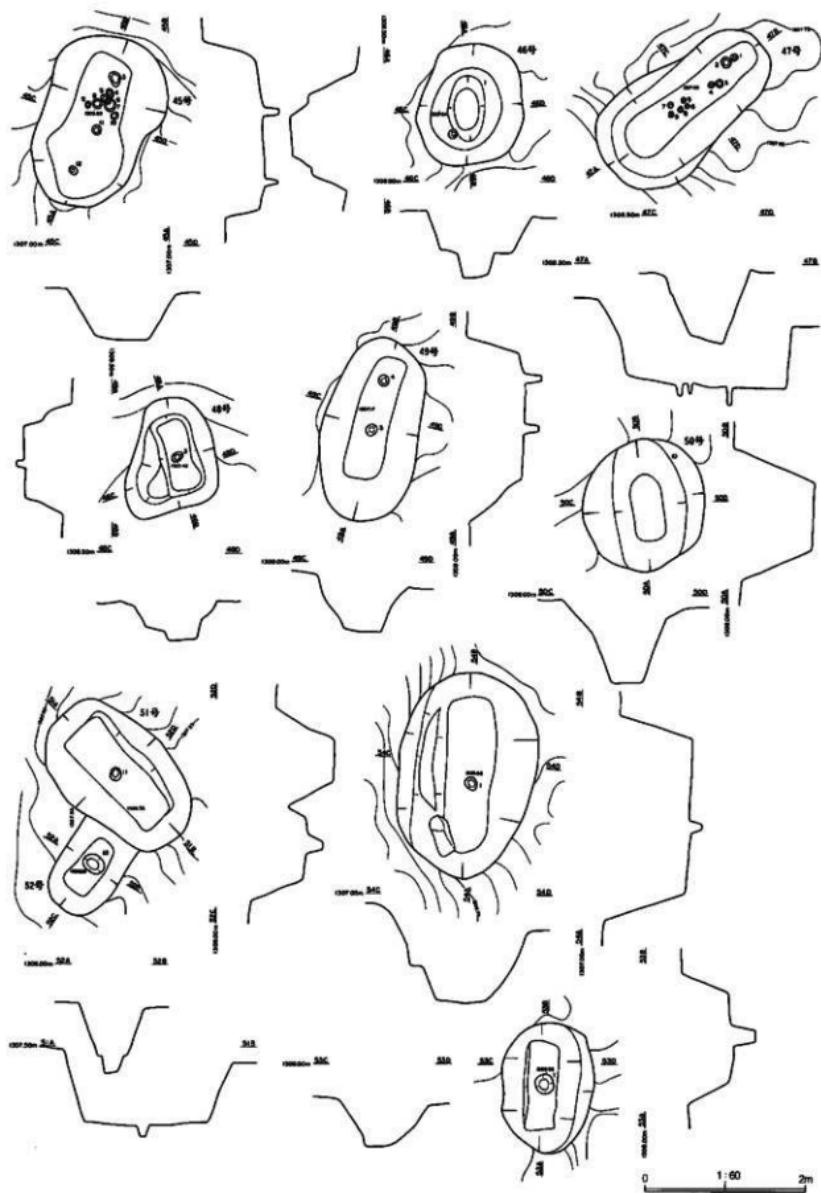
位 置 H-7 グリッド  
形 態 長方形  
規 模 239×159×78  
床 面 長方形  
壁 ほぼ45度で立ち上がる。  
備 考 斜面に対して、ほぼ45度傾く。



PL49 42号陥し穴



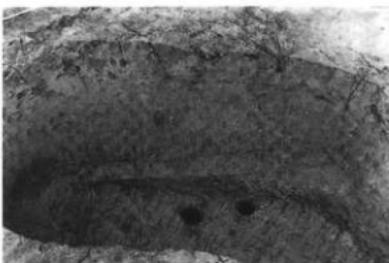
第9図 賽し穴実測図(1:60)



第10図 鑿し穴実測図(1 : 60)

#### 43号陥し穴

位置 H-6 グリッド  
形態 長方形  
規模 245×／×65  
床面 長方形  
壁 ほぼ直に近い。  
備考 44号と重複する。新旧関係は不明である。



PL52 44号陥し穴

#### 44号陥し穴(PL52)

位置 H-6 グリッド  
形態 楕円形  
規模 ／×108×75  
床面 長方形か?  
壁 ほぼ45度で立ち上がる。  
備考 長軸は、南北にとる。



PL53 72号陥し穴

#### 72号陥し穴(PL53)

位置 I-6 グリッド  
形態 長方形  
規模 104×75×76  
床面 楕円形  
壁 直に立ち上がる。  
備考 長軸は、斜面に対してほぼ平行する。



PL54 47号陥し穴

#### 47号陥し穴(PL54)

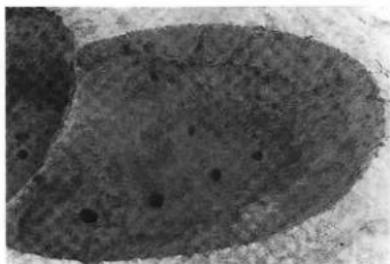
位置 I・J-3 グリッド  
形態 長方形  
規模 243×107×82  
床面 長方形  
壁 直に立ち上がる。  
備考 斜面に対して、直交する。



PL55 50号陥し穴

#### 50号陥し穴(PL55)

位置 J-3・4 グリッド  
形態 円形  
規模 165×152×95  
床面 長方形  
壁 ほぼ直に立ち上がる。  
備考 床面の長軸は、ほぼ南北にある。



PL62 74号陷し穴

74号陷し穴(PL62)

位 置 K・L-6グリッド

形 態 楕円形

規 模 215×160×70

床 面 楕円形

壁 曲線を描いて立ち上がる。

備 考 斜面に平行する。75号と重複する。



PL63 75号陷し穴

75号陷し穴(PL63)

位 置 L-6グリッド

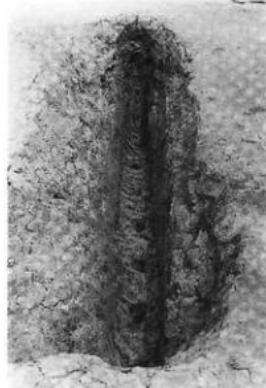
形 態 楕円形

規 模 180×125×80

床 面 長方形

壁 ほぼ直に立ち上がる。

備 考 斜面に対し、ほぼ45度である。



PL64 57号陷し穴

57号陷し穴(PL64)

位 置 M-6グリッド

形 態 長椭円形

規 模 352×98×94

床 面 細長い椭円形

壁 直に立ち上がる。

備 考 長軸は、斜面に平行する。

中世以降と思われる。



PL65 58号陷し穴

58号陷し穴(PL65)

位 置 M-6グリッド

形 態 長椭円形

規 模 254×(75)×115

床 面 細長い椭円形

壁 直に立ち上がる。

備 考 59号と重複し、58号のほうが新しい。

中世以降と思われる。

59号陷し穴

位 置 M-6グリッド

形 態 長方形

規 模 (300)×130×70

床 面 長方形

壁 ほぼ直に立ち上がる。

備 考 長軸はほぼ南北にあり、斜面に平行する。

60号陷し穴

位 置 M-6グリッド

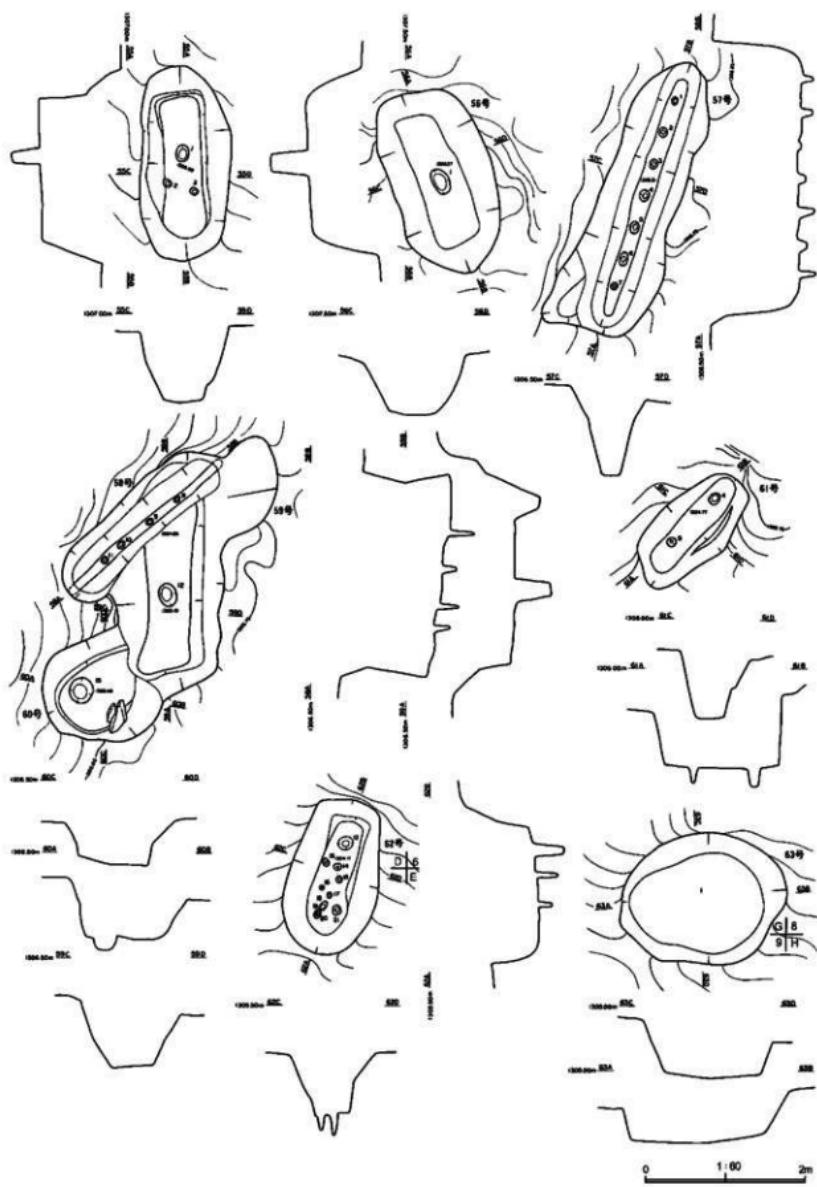
形 態 楕円形

規 模 /×130×52

床 面 楕円形

壁 直に近い。

備 考 59号と重複し、60号のほうが古い。



第11図 脱し穴実測図(1:60)

### 66号陥し穴

位 置 K-9 グリッド  
形 態 ほぼ円形  
規 模 170×153×96  
床 面 長方形  
壁 丸く立ち上がる。  
備 考 長軸は、斜面に対して直交する。

### 67号陥し穴(PL70)

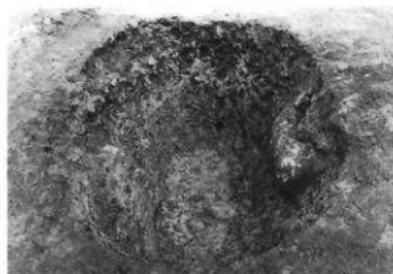
位 置 K-8・9 グリッド  
形 態 長方形  
規 模 254×157×67  
床 面 長方形  
壁 ほぼ45度で立ち上がる。  
備 考 長軸は、斜面に対して平行する。

### 68号陥し穴(PL67)

位 置 L・M-9 グリッド  
形 態 楕円形  
規 模 194×145×80  
床 面 楕円形  
壁 ほぼ45度で立ち上がる。  
備 考 長軸は、ほぼ南北にある。

### 71号陥し穴(PL68)

位 置 M・N-8・9 グリッド  
形 態 長方形  
規 模 264×114×54  
床 面 長方形  
壁 ほぼ直に立ち上がり、浅い。  
備 考 長軸は、ほぼ南北にある。



PL67 68号陥し穴



PL68 71号陥し穴



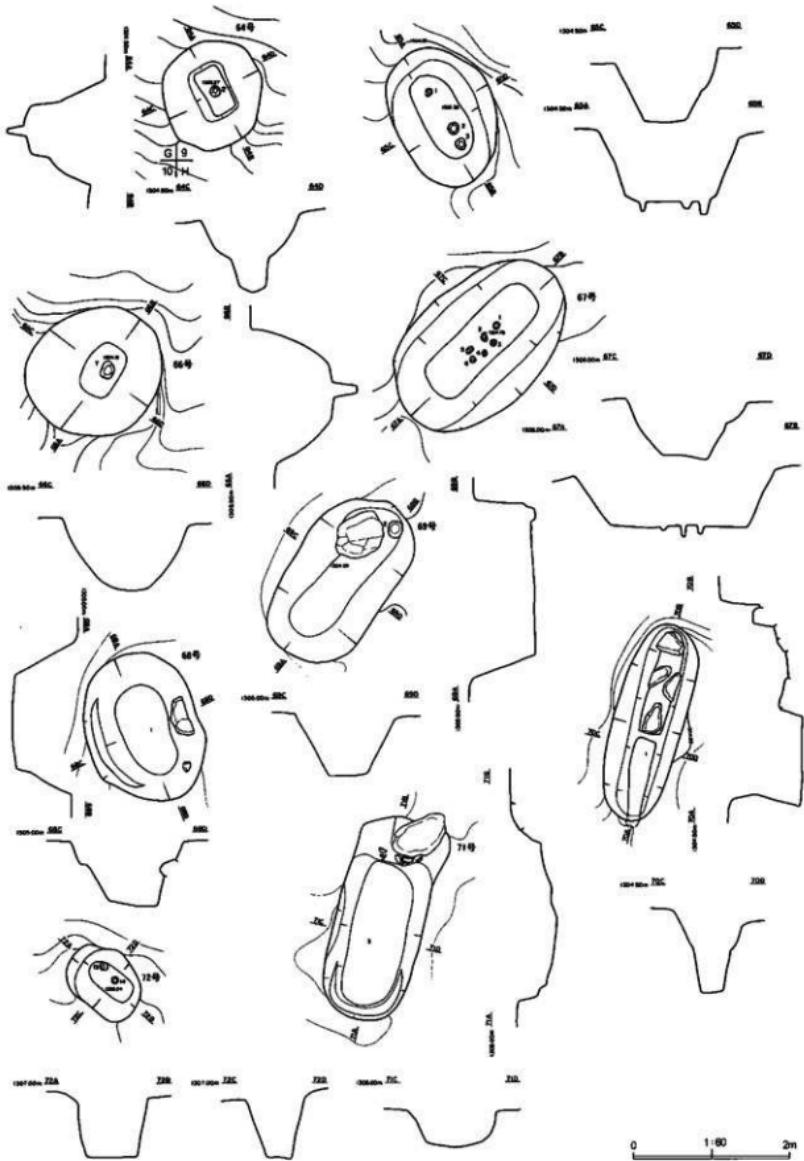
PL69 69号陥し穴

### 69号陥し穴(PL69)

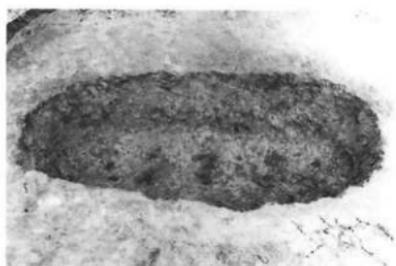
位 置 M-8・9 グリッド  
形 態 楕円形  
規 模 225×130×75  
床 面 楕円形  
壁 立ち上がりは、ほぼ直に近い。  
備 考 長軸は、斜面に平行する。



PL70 67号陥し穴



第12図 脱し穴実測図(1:60)



PL72 73号陥し穴



PL73 73号陥し穴

#### 73号陥し穴(PL72・73)

位置 N-5 グリッド  
形態 長方形  
規模 203×88×62  
床面 長方形  
壁 直に立ち上がる。  
備考 長軸は、斜面に対して平行する。

#### 76号陥し穴

位置 I-8 グリッド  
形態 円形  
規模 160×149×120  
床面 楕円形  
壁 ほぼ直に立ち上がる。  
備考 長軸は、ほぼ斜面に直交する。



PL74 28号陥し穴



PL75 28号陥し穴

#### 63号陥し穴

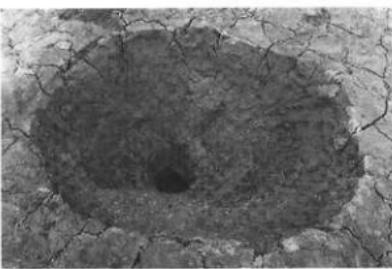
位置 F-7 グリッド  
形態 長楕円形  
規模 340×100×80  
床面 細長い楕円形  
壁 ほぼ45°で立ち上がる。  
備考 38号と重複し、斜面に直交する。  
中世以降と思われる。

#### 64号陥し穴

位置 H-9 グリッド  
形態 円形  
規模 135×128×88  
床面 長方形で、ほぼ中央に落ち込みが存在する。  
壁 ロート状に開く。  
備考



PL 1 1号陥し穴



PL31 24号陥し穴



PL36 29号陥し穴



PL50 45号陥し穴半截



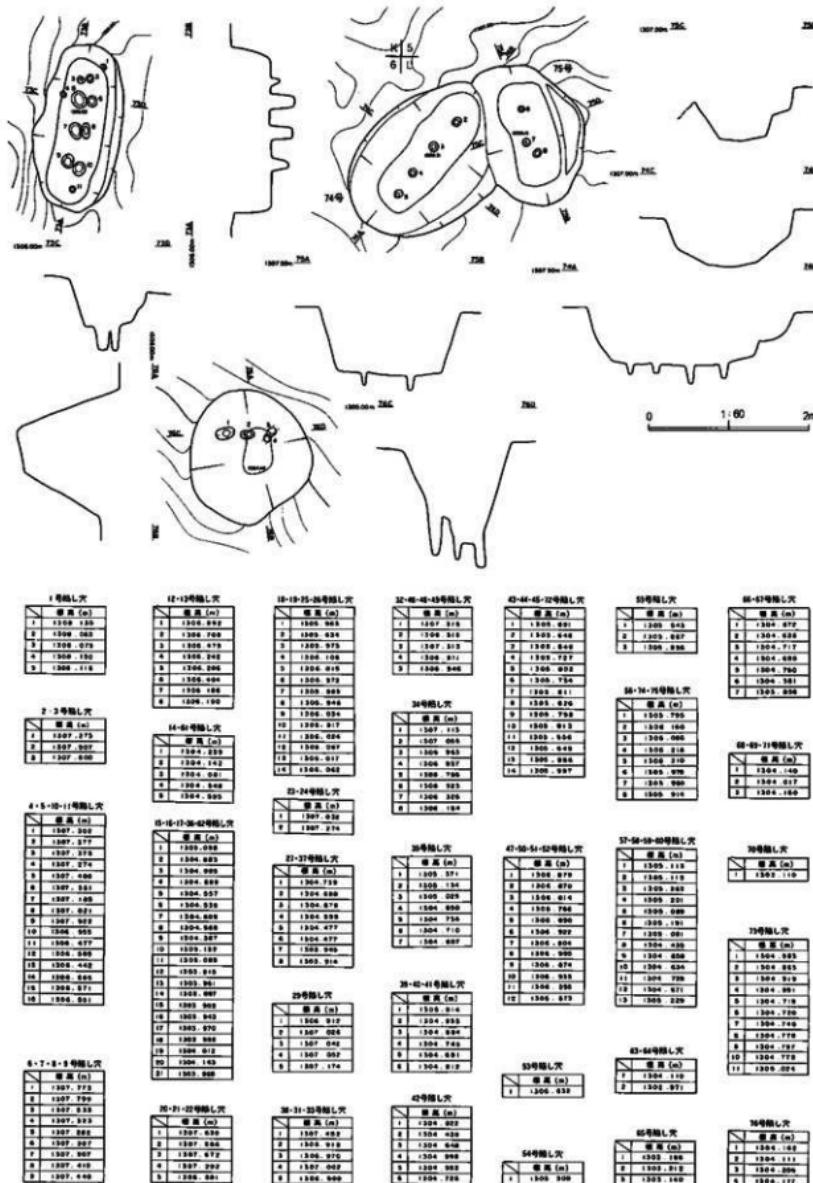
PL56 51号陥し穴



PL52 57号陥し穴



PL51 45号陥し穴完掘



第13図 陥し穴実測図(1:60)及び小穴の深さ

### 1号脇し穴

位置 B-2グリッド  
形態 長楕円形  
規模 279×92×35  
床面 長楕円形  
壁 タライ状で、浅い。  
備考 平坦な所につくられ、長軸は南北にある。

### 24号脇し穴

位置 F-3グリッド  
形態 椭円形  
規模 159×127×60  
床面 椭円形  
壁 継やかに立ち上がる。  
備考 長軸は、南北にある。

### 29号脇し穴

位置 H-2グリッド  
形態 長方形  
規模 214×150×75  
床面 長方形  
壁 ほぼ直に立ち上がる。  
備考 北側の斜面に存在し、長軸は  
ほぼ南北にある。

### 45号脇し穴

位置 H-I-6グリッド  
形態 椭円形  
規模 218×130×67  
床面 不整長方形  
壁 ほぼ直に立ち上がる。  
備考 斜面に対してほぼ直交する。

### 51号脇し穴

位置 J-K-3・4グリッド  
形態 長方形  
規模 207×132×95  
床面 長方形  
壁 ほぼ直に立ち上がる。  
備考 斜面に対してほぼ45度である。

### 52号脇し穴

位置 J-K-3・4グリッド  
形態 長方形  
規模 (125)×80×62  
床面 長方形 51号(新)・52号(旧)  
壁 ほぼ45度で立ち上がる。

### 53号脇し穴

位置 K-4・5グリッド  
形態 椭円形  
規模 162×114×62  
床面 長方形  
壁 ほぼ直に近い。  
備考 長軸は、南北にある。

### 54号脇し穴

位置 L-M-4・5グリッド  
形態 椭円形  
規模 254×174×109  
床面 長方形  
壁 ほぼ直に近い。  
備考 長軸は、ほぼ南北にある。

### 55号脇し穴

位置 I-J-6グリッド  
形態 長方形  
規模 243×111×80  
床面 長方形  
壁 ほぼ直に近い。  
備考 斜面に対して、ほぼ45度傾く。

### 56号脇し穴

位置 J-K-6グリッド  
形態 長方形  
規模 236×130×73  
床面 長方形  
壁 タライ状を呈する。  
備考 斜面にほぼ直交する。

### 65号脇し穴

位置 J-K-11グリッド  
形態 椭円形  
規模 178×132×77  
床面 椭円形  
壁 ほぼ45度で立ち上がる。  
備考 斜面に対して、ほぼ平行する。

### 70号脇し穴

位置 M-N-10グリッド  
形態 長楕円形  
規模 255×86×95  
床面 長楕円形 4ヶの礎が存在する。  
壁 南側では袋状を呈する。  
備考 中世以降と思われる。



PL58 53号陥し穴



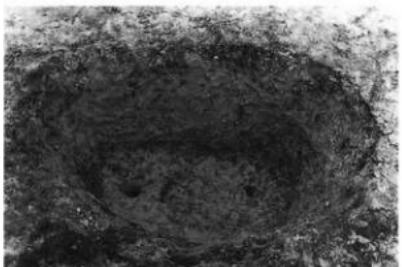
PL59 54号陥し穴



PL60 55号陥し穴



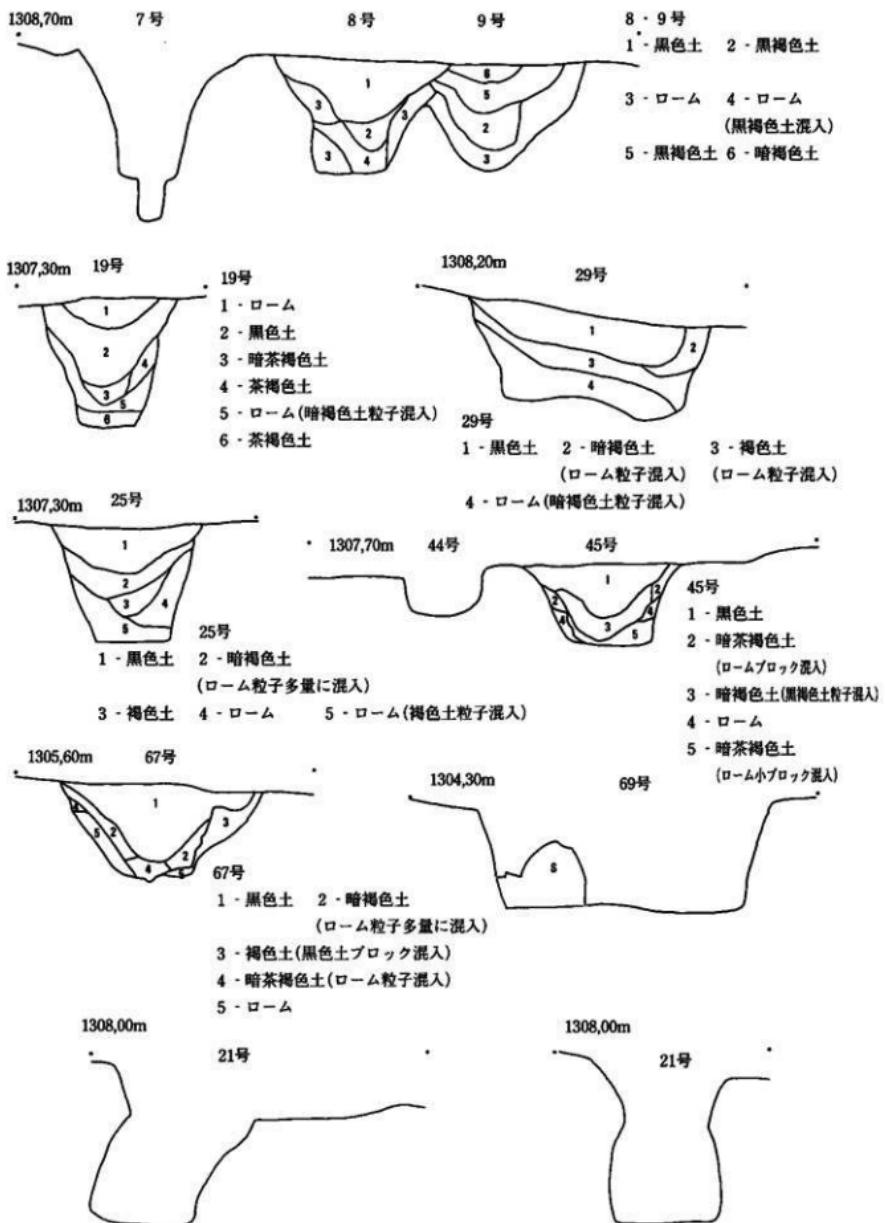
PL61 56号陥し穴



PL66 65号陥し穴



PL71 70号陥し穴



第14図 8・9・19・21・25・29・45・67・69号露し穴(1:40)

## 第4章 遺物（第15図）

1 陥し穴の床の小ピットからの出土である。杭の端部は尖らせてあり、現存する長さは12.1cm、太さは3.4cmである。また、表面には木の皮が付着している。(NO27)

2 陥し穴の床の南から2つ目の小ピットからの出土である。杭の端部は尖らせてあり、現存する長さは8.6cm、太さは2cmである。(NO34)

3 陥し穴の床の南から2つ目の小ピットからの出土である。杭の端部は尖らせてあり、現存する長さは10.7cm、太さは1.8cm、幅2.8cmの偏平な杭である。(NO36)

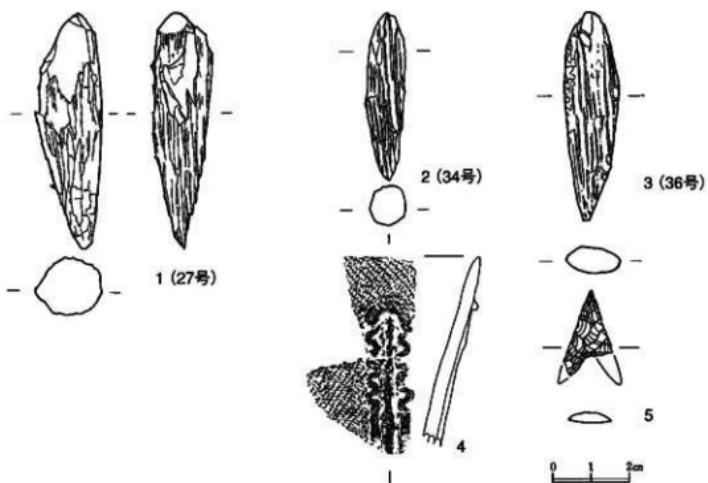
この3本の杭は、陥し穴の床面から直接打ち込まれたものと考えられる。それは、杭の太さと小ピットの径が同じであることによるものである。このことから、縄文時代の陥し穴と区別することが可能である。

4 重機による耕土作業中に、5点の土器片が見つかった。どの破片も胎土・色調・施文手法が同じであることから、同一個体のものと思われる。唯一、口縁部片と胴部の一部が接合された。

施文手法は、器面の口縁部の粘土紐付近から胴下半部にかけて横方向にR-Lの繩文が施され、貼り付けされた隙間には、一部繩文の施文が残存し、ほとんどのものは貼り付けによって磨り消されている。その後粘土紐が貼付される。垂下させられた粘土紐は、まず最初に中央の棒状の貼り付けがなされ、その次に両脇の蛇行する懸垂文、最後に逆「U」字状の粘土紐が貼り付けされる。口縁部には、無文帯が形成されていたが、最終的に、口唇部から逆「U」字状の貼り付け部までR-Lの単節繩文が縱方向に施文され、下部の繩文とは方向を異にする。焼成は良好で、外面の色調はやや赤みがかった褐色で、内面は黒ずんだ褐色を呈する。胎土には砂粒子が含まれている。口唇部の内面は、横なでされた痕跡が残されている。

この土器は、曾利Ⅱ式期に属するものである。

5 3号陥し穴付近から出土したものである。基部に抉りをいたれた回基無茎石錐である。両脚部は、欠損する。長さは現存で2.25cm、巾1.2cm、厚さ2.5cm、重さ0.33g、先端角度39°である。石材は黒曜石製で、裏面は先端部と基部に剥離調整が認められるほかは、調整は施されていない。



第15図 27・34・36号陥し穴出土杭実測図(1:2)・土器拓本(1:3)・石錐(1:1)

## 第5章 まとめ

本遺跡で確認された陥し穴の総数は76基で、そのうち縄文時代に属するものと考えられる陥し穴は67基、中世以降と考えられるものの9基で、そのうち3基には床面にあけられた小穴に杭の残存が認められた。

まず縄文時代と考えられる陥し穴の覆土は、非常にしまりがよく黒色を呈するものである。なかでもさらに旧い陥し穴と考えられる覆土は、確認面で暗褐色土を呈しその下の層には黒色土が堆積しているものと思われる。時期不明ではあるが、黒色土がロームを囲ったドーナツ状を呈する陥し穴の覆土も存在し、黒色土のしまり具合は非常によい。このようなことから縄文時代の陥し穴と考えられるのであるが、遺物の出土がないためはっきりとしたことはいえない。

陥し穴の形態は、A形態からG形態まで分類される。G形態は床面に小穴が認められないもの、B形態は床面に1本の小穴があけられているもの、C形態は2本の小穴があけられているものである。D形態は床面に3本の小穴があけられているもの、E形態は2本づつ並行して小穴があけられているもの、F形態は床面に小穴が多数あけられているものとし、G形態は細長い長楕円形のものである。

A形態は、9.21.30.31.50.63.69.68.71である。B形態は、2.16.20.23.24.26.32.38.41.42.46.48.51.52.53.54.56.59.64.66である。C形態は、3.6.7.11.15.17.18.25.37.39.43.44.49.60.61.72である。D形態は、8.12.14.22.33.40.55.65.75.76である。E形態は、4.67.73である。F形態は、1.10.13.19.29.45.47.62.74である。G形態は、5.27.28.34.35.36.57.58.70である。

ここで陥し穴の調査中に、覆土上面で色調の記録を行った結果を記載しておく。

1号(黒色土)2号(黒色土)3号(黒色土)4号(暗褐色土でその下は黒色土)5号(黒色土)6号(黒色土)7号(黒色土)8号(黒色土)9号(暗褐色土でその下は黒色土)10号(黒色土)11号(黒色土)12号(黒色土)13号(黒色土)14号(黒色土)15号(黒色土)16号(黒色土)17号(上面はロームでその下は黒色土)18号(黒色土)19号(上面はロームでその下は黒色土)20号(暗褐色土でその下は黒色土)21号(黒色土)22号(黒色土)23号(黒色土)24号(黒色土)25号(黒色土)26号(黒色土)27号(黒色土軟弱)28号(黒色土軟弱)29号(黒色土)30号(黒色土)31号(黒色土)32号(黒色土)33号(黒色土)34号(黒色土軟弱)35号(黒色土軟弱)36号(黒色土軟弱)37号(黒色土)38号(黒色土)39号(黒色土風倒木痕内)40号(黒色土風倒木痕内)41号(黒色土風倒木痕内)42号(黒色土)43号(黒色土)44号(黒色土)45号(黒色土)46号(暗褐色土でその下は黒色土)47号(黒色土)48号(黒色土)49号(黒色土)50号(黒色土)51号(黒色土)52号(暗褐色土でその下は黒色土)53号(暗褐色土)54号(暗褐色土)55号(暗褐色土)56号(暗褐色土)57号(黒色土軟弱)58号(黒色土軟弱)59号(黒色土)60号(暗褐色土でその下は黒色土)61号(黒色土)62号(黒色土)63号(黒色土)64号(黒色土)65号(黒色土)66号(黒色土)67号(黒色土)68号(黒色土)69号(黒色土)70号(黒色土軟弱)71号(黒色土)72号(黒色土)73号(黒色土)74号(暗褐色土でその下は黒色土)75号(黒色土)である。

特にG形態に属するものは、1989年度に調査された「丘の公園第5遺跡」でも発見されており、掘削工具痕が見られる陥し穴が存在しており、陥し穴の時期は古代以降の遺構として取り扱っている。本遺跡の陥し穴も形態的に類似しており、同時期ないしそれ以降としておいた。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至まで、多くの皆様方のご協力をいただきとともに、高根町教育委員会には大変お世話になりましたことを末筆ではありますが厚く御礼申し上げます。

# 清里バイパス第2遺跡

# 第1章 発掘調査経過

## 第1節 発掘調査に至る経過

本遺跡の立地する清里地域の通称念場原は、東を大門川、西を川俣川の深い谷によって切られて、八ヶ岳の広大な裾野の一部を構成しており大半が森林や牧草地のため、遺跡の把握が困難な地域である。このため、本地域に山梨県道路公社により須玉・八ヶ岳公園線(通称清里バイパス)建設事業が計画され、道路公社・学術文化課・埋蔵文化財センターの協議により早急に試掘調査を行うことになった。その結果、今回の発掘調査箇所約2,600m<sup>2</sup>において表土(腐植土)下部の暗褐色及び黒褐色粘質土中より遺物が検出されたため本調査に至った。

### 範囲確認試掘調査

1996年4月24日～5月24日

#### 本調査

1996年7月18日 文化庁に発掘通知を提出する。

1996年7月29日 発掘調査を開始する。

1996年9月19日 発掘調査を終了する。

1996年9月30日 埋蔵文化財発見届を長坂警察署に提出する。

## 第2節 発掘調査組織

調査主任 山梨県教育委員会

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

調査担当者 坂本美夫・高野玄明・川手昌英・雨宮芳夫

試掘担当者 小林広和・森原明廣

調査参加者 利根川袈裟三・利根川茂・津金孝義・長田光枝・三井ちえの・永留祥男・志村君子・中込里子  
大久保発子・永井由美子

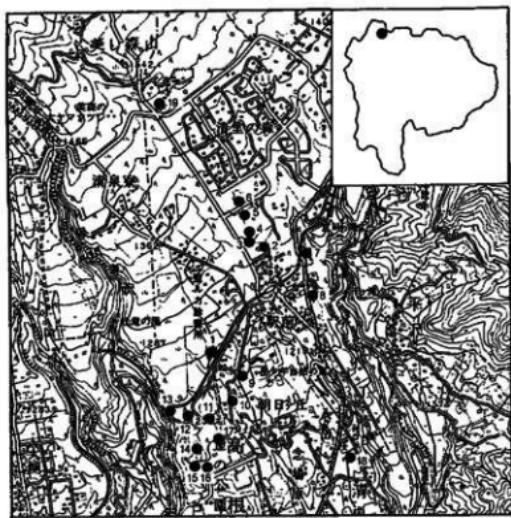
協力機関 高根町教育委員会・財団法人キープ協会

## 第3節 調査の方法と経過

試掘調査によって、遺跡が確認された約2,600m<sup>2</sup>について本調査を行った。調査は、表土(腐植土)を重機を用いて除去し、試掘によって遺物が検出された暗褐色及び黒褐色土を人力による掘り下げを行った。基本坑は道路センター坑を基準に10mメッシュを組み、精査を行った。その結果、縄文時代早期中頃の山形・楕円押型文や該期の石器、また、鍛器・石核・二次加工を施す石器類など出土している。しかし、遺構などは全く検出できなかった。これは、調査区内に小さな沢状の落ち込みが数条検出され、このため、遺物は付近から流れ込んでいるものと考えられる。

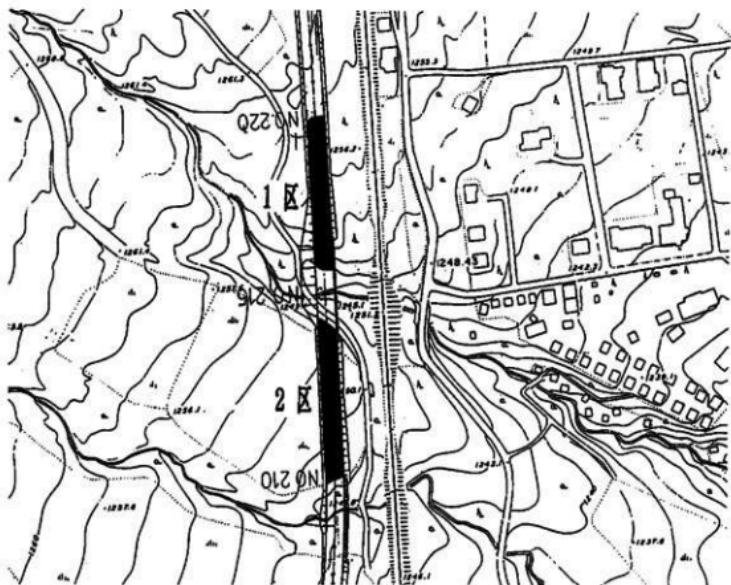
## 第2章 遺跡の位置と立地

本調査を行った清里地域は、山梨県の北西部、八ヶ岳南麓の北巨摩郡高根町にある。清里はその中央を流れる大門川の深い谷によって、地形的に二部されている。大門川東岸には、山にコの字形に囲まれた樅山地区と浅川地区がある。山地が迫る両地域と違い、大門川西岸の念場地区は、八ヶ岳の緩やかな裾野である。この地域は、西側で川俣川により開削された100mにもおよぶ断崖で作られ、東側も大門川の深い谷によって切られており、孤立した台地状を呈し、通称「念場原」と呼ばれている。また、この地域は、大半が森林や牧草地のため遺跡の把握が困難な地域ではあるものの、『甲斐国志』によれば、中世には念場千軒とし栄えたと記されている。また、近年、詳細な分布調査により

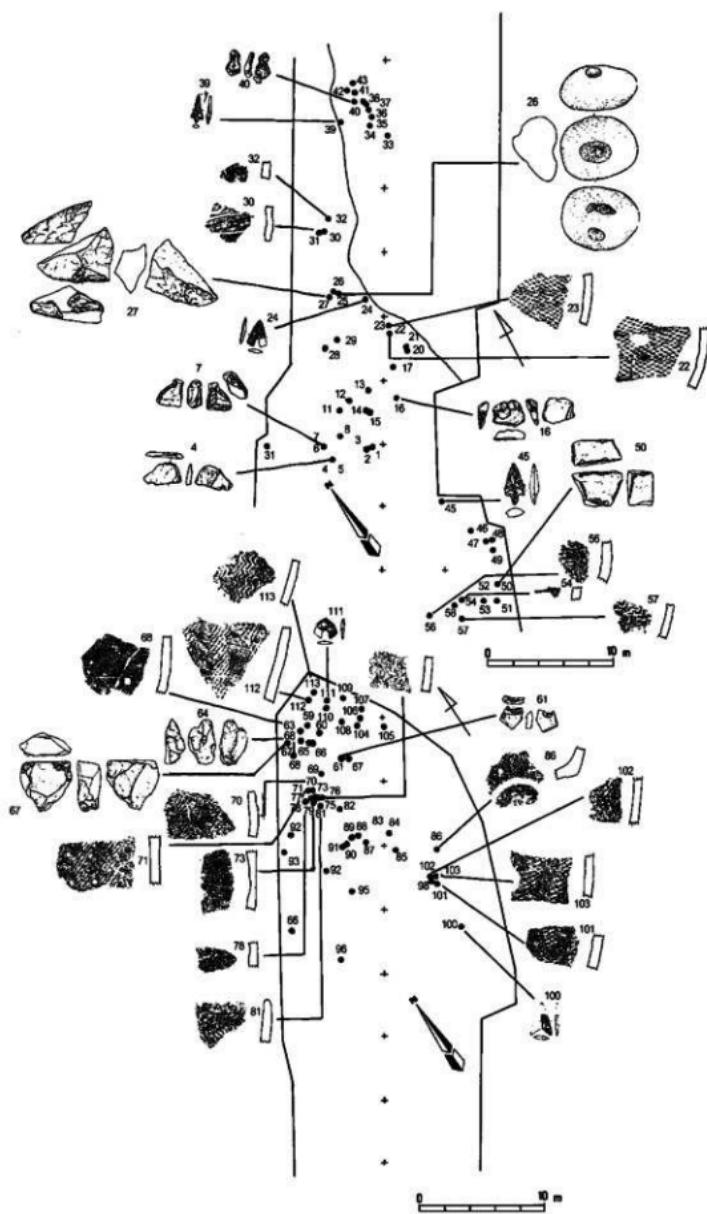


第1図 遺跡分布図(S=1/25,000)

- 1.清里バイパス第2遺跡
- 2.清里バイパス第1遺跡
- 3.清里の森第1遺跡
- 4.清里の森第2遺跡
- 5.清里の森第3遺跡
- 6.清里の森第4遺跡
- 7.念場原A遺跡
- 8.念場原B遺跡
- 9.朝日ヶ丘A遺跡
- 10.朝日ヶ丘B遺跡
- 11.丘の公園第6遺跡
- 12.丘の公園第1遺跡
- 13.丘の公園第7遺跡
- 14.丘の公園第2遺跡
- 15.丘の公園第4遺跡
- 16.丘の公園第3遺跡
- 17.丘の公園第5遺跡
- 18.念場原F遺跡
- 19.からまつ湖遺跡



第2図 遺跡周辺の地形と調査範囲



第3図 清里バイパス第2遺跡・全体図・遺物平面図

本地域には旧石器～中世に至る遺跡が数ヶ所に存在していることから、今回の本調査もそれなりの成果が期待された。

## 第3章 遺物

### 第1節 出土土器(第4図1～32)

発掘区域からは、試掘時を含めて32点の縄文土器が出土した。

1は山形文で2単位4条と思われる。おそらく縦位に施文するもので、施文間をややあけ、磨り消しているようである。2・3も山形文であるが、小片のため施文具は不明である。4～6は同一個体の楕円文で、楕円の粒が細かいことから穀粒文と呼ばれるものに近い。2単位である。楕円のネガティブな部分が直線をなすことから、当初の文様割付が格子目状に沈線を刻む方法でなされたと想定される。密接施文部分で重複をわずかに磨り消している。5のように文様部分の粘土が剥がるのは押型文土器の特徴である。7はやや砂粒の多い土器でLRの単節縄文を施している。押型文土器よりやや厚手であるが、胎土から押型文土器に伴うものと判断される。8～16は帯状縄文施文土器で、横沢遺跡の特徴的手法である。無節のRを縦位にほどこしたもので、いずれもボソボソと崩壊しやすい。12は帯状施文の交点と思われ、やや施文方向を異にしている。16は小片であるが、結節縄文を回転施文したもので、器壁は薄く、器面はよく整形されており、胎土から押型文土器に伴ってよい土器である。伴うすれば、施文具の置換効果を意識した結節縄文による山形文とも考えられる。7は沈線で両端を囲まれた半陸帯の上を丸棒状の工具で刺突するもので、田戸戸下層式に比定されよう。18～30は同一個体と思われる無文の土器であるが、22、24はやや趣を異にして別個体である。31は纖維を含み、やや厚手の土器であり、押型文期の土器とは思われない。32は平底を呈する土器で、これも押型文期の土器ではない。

#### 押型文土器について

今回の清里バイパス第2遺跡は、特に遺構に伴ったものではなく、一括遺物として同時性に不安はあるが、遺物がほとんどない地域にあっては、押型文期のキャンプ地との想定も可能であり、そうすれば同時性の強い一括遺物と言えるのである。

山梨県は関東地方と中部地方の中間にあって、縄文時代の土器変遷のうえからも、関東地方の影響を強く受ける時期と、中部地方、東海地方の影響を受ける時期がある。その中で、押型文期の様相はほとんど明らかでなく、隣接する長野県の鍬式土器、縄久保式土器に明確に規定できる土器はほとんどないのである。そこで、県内の押型文土器を遺跡ごとに分析し、類型化して、この清里バイパス第2遺跡の意味を明らかにしたいと思う。

○仲大地タイプ 上野原町仲大地遺跡の資料は口唇部に施文し、内面には施文のないもので、口辺部に2条の横位帯状施文をし、2帯目から縦位に帯状施文するものである。

○沢中原タイプ 大月市沢中原遺跡の資料は口唇部に施文はないが、口縁部に1帯横位に山形文を巡らし、この山形文の途中から、縦位に山形文を密接施文するものである。

○奥豊原タイプ 沢中原タイプと同様な縦横重複施文であるが、口辺部の重複施文が完全であり、口唇部にも施文があり、わずかではあるが、縦位帯状施文の意識は残っているようである。

○尾咲原タイプ 尾咲原遺跡のはば完形の山形押型文土器は口唇部に施文し、口縁部に横位に1帯巡らし、それ以下を縦位に山形文を施文し、縦位押型文間を磨り消しており、ここでも帯状施文の意識が残っている。

○水呑場Aタイプ 口唇部に施文し、口辺部に2帯横位施文、体部に縦位帯状施文するもので重複施文はない。

○水呑場Bタイプ 口唇部に施文し、口縁以下全面密接縦位施文するものである。

さて、押型文土器には初現と下限の問題があり、いまだ関東地方の撚糸文土器群との時間的関係は必ずしも明白ではない。初現について押型文土器と表裏縄文土器が一部並行することは、県内の次の資料をもって宮下健司、堀内真氏によって述べられている。富士吉田市池の元遺跡で1号住居址から、表裏縄文土器、表裏撚糸文土器、撚糸文土器、

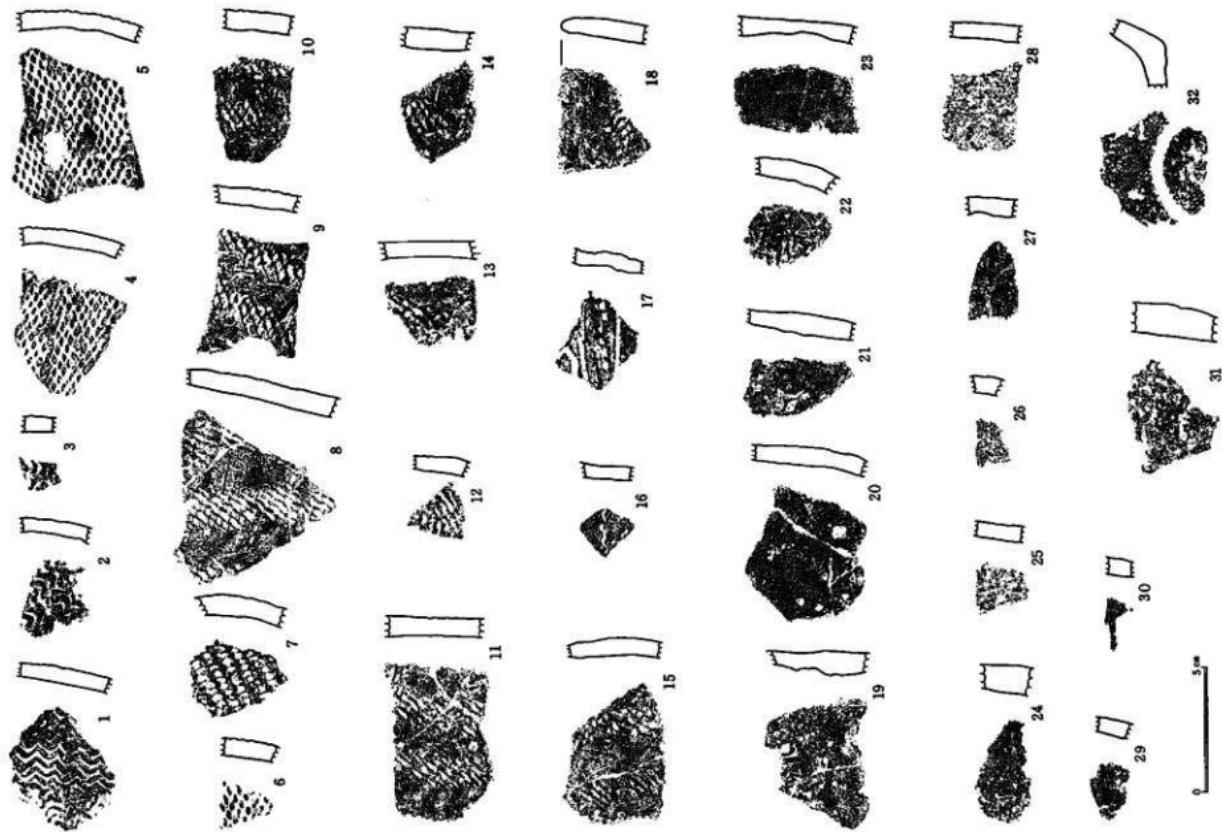
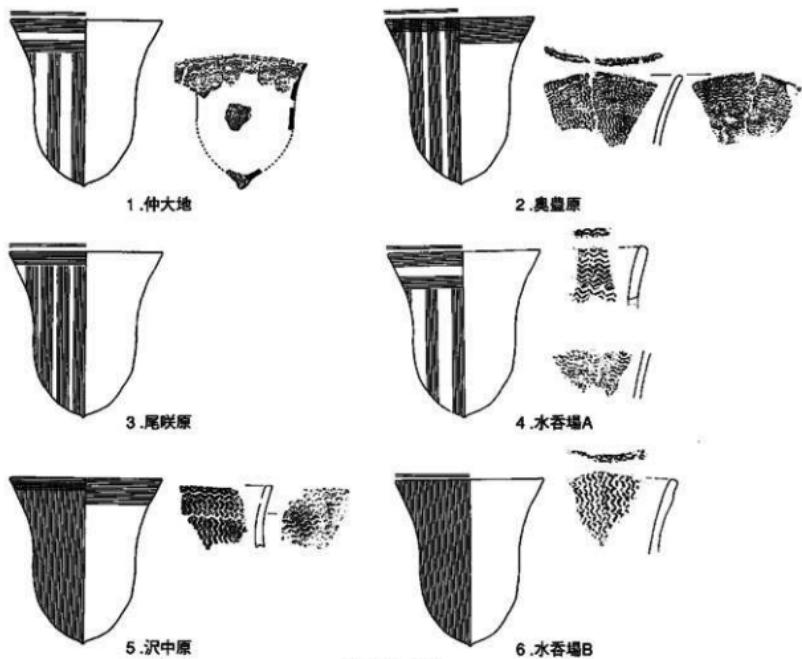


圖4 出土土器



第5図 貫目

梢円押型文土器が、2号住居址からは表裏縄文土器、縄文土器、表裏燃糸文土器、燃糸文土器、網目状燃糸文土器、山形文土器（1片は振幅弱いもの）の出土がある。また最近では宮崎朝雄、金子直行両氏により、施文具の置換による型式的検討から、表裏縄文土器と押型文土器との並行関係が指摘されている。中部地方居住者にとって、富士吉田市池の元遺跡や上野原町仲大地遺跡の出土例は無視できない事実であり、一方が丸棒に彫刻を施した押型文であり、他方が縄文、燃糸文による表裏縄文土器、表裏燃糸文土器、縄文土器、燃糸文土器である。これらは施文方向と施文部位の関係はまったくかけ離れたものではなく、むしろ何らかの関係が思考される。

施文方向、施文部位との関係といえば、表裏縄文土器のように表面、口唇部、裏面部と施文する奥豊原タイプ、口唇部に施文のない沢中原タイプがあり、次に裏面への施文が失われ、口唇部に施文の残る仲大地タイプや尾咲原タイプや水呑場タイプがあるのである。問題は仲大地の復元された土器の山形押型文は振幅が弱く、波長の長いもので、条数も4条である。表裏縄文土器とともに出土した池の元遺跡の押型文土器の山形文がやはり振幅が弱く、両者には共通性があるように思われる。また梢円文は縦位施文で粒の小さいものであるが注目される。

さて、山梨県の地理的な環境から押型文土器と関東地方の諸形式との遺跡における出土事例を必ずしも同時性を指摘できるわけではないが列挙しておきたい。仲大地遺跡では表裏縄文土器、燃糸文土器と仲大地タイプ、梢円押型文土器が出土している。池の元遺跡では先述したとおりである。沢中原遺跡では近年になって東山式と呼ばれる無文土器が見られる。この東山式は西桂町寺野遺跡でも出土しており、ここでも山形文、梢円文の押型文土器が見られる。韮崎市仲尾根遺跡、奥豊原遺跡でも燃糸文土器の出土はあるが、在地の燃糸文土器であろう。大月市外ガイド遺跡では梢円文土器と燃糸文土器の出土があるが、この燃糸文土器の位置づけは難しい。上野原町穴沢遺跡では梢円文土器の出土があり、時間的に関係しそうな土器型式としては、貝殻腹縁文を多用した田戸上層式があるが併存の確証はない。

仲大地遺跡の表裏縄文、燃糸文、押型文土器の位置づけは問題があるにしても、池の元遺跡の共存は容認できるも

のではなかろうか。また、清里バイパス第2遺跡の縄文帶状施文土器は撻沢式に同定し、沈縫文土器を田戸下層式に同定するとは大方の理解を得られよう。なお、関東地方撻糸文土器群と併行する押型文土器を先述した各タイプとどのように対応させるかは確実な件出事例をまって再考したいと思う。

(小野 正文)

## 第2節 出土石器(第6・7図)

今回の調査で出土した石器、剥片類は、黒曜石製のものでは石礫8点、剥片23点、碎片(1cm角以下の大きさの剥片)35点、使用痕のある剥片1点、石核ないし分割原石6点、二次加工ある剥片2点、珪岩、珪質頁岩、メノウなどの黒曜石以外の石材では二次加工ある剥片2点、剥片5点、碎片3点、礫器1点、打撃痕のある礫2点、くばみ石1点で、総計89点である。このうちの石器の一部を第6・7図に示した。

### ○石礫(第6図1~7)

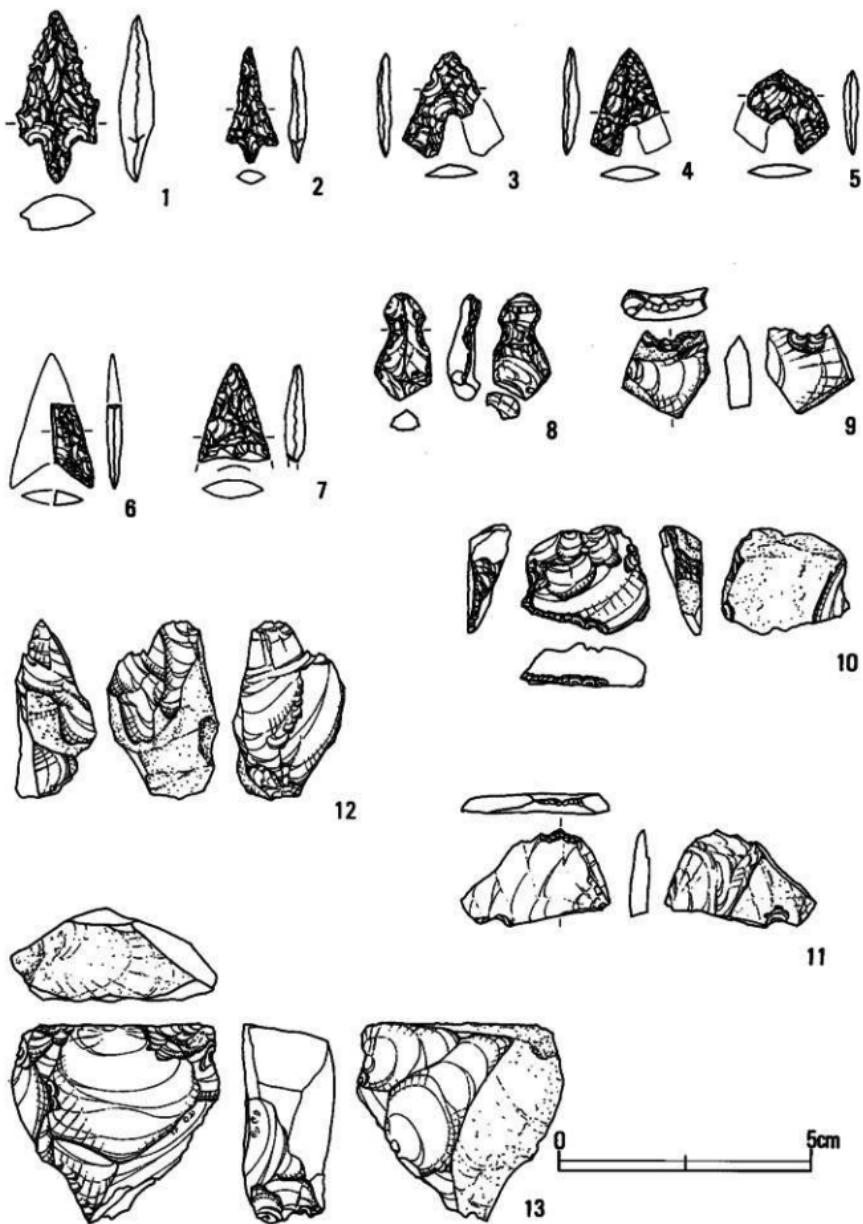
黒曜石製のみである。8点のうち2点は小片のため図示しなかった。また、第6図3は試掘調査時に出土したもので、上記の集計には入っていない。第6図1は回基有茎礫といわゆる五角形礫である。五角形の尖頭部を成す2辺では鋸齒縁加工が施され、表裏面とも右縁側に打点を持つ剥離が連続する。左右に突出した2辺はやや内湾し、鋸齒状にならないよう細かく調整されている。回基を成す抉れ部はそれぞれ1枚の剥離によって形成されている。長さ3.4cm、幅1.7cm、厚さ0.7cm、重さ2.2gである。この形態は縄文時代晩期に特有の形態とされる。2は回基有茎礫である。左右両縁部がやや内湾し弱い鋸齒縁加工が成されている。左縁部の先端部側と右縁部の基部側に打点の残る剥離が連続し先端部と基部側とが作り分けられていたと思われる。左右に突出する反し部分では左右とも垂直方向からの小剥離が見られるが、制作時以外に二次的に剥離したものと思われ、反しがもう少し長かった可能性がある。長さ2.3cm、幅1.0cm、厚さ0.3cm、重さ0.4gである。草創期に有舌尖頭器の小型品に似るが、初期の有茎礫を含め回基になるものが多く、さらに黒曜石製のものはほとんど見られない。回基有茎礫は晩期に多く見られるとされ(鈴木1983)、金生遺跡(山梨県教委1989)の出土石礫の中にも同様なものが見いだされるので、縄文時代晩期の所産であろう。3~5はいわゆる鉤形礫で、押型文土器に伴う形態である。いずれも、脚部の端部が矩形に仕上げられている。なお、図示しなかった2点のうち1点がこの形態の脚部の破片である。したがって、今回の発掘で鉤形礫は3点、試掘も含めると4点が出土している。いずれも、脚部の片方を欠損している。また、いずれも非常に薄く仕上げられている。6・7は回基無茎礫の欠損品である。それぞれの重さは、3が0.5g、4が0.4g、5が0.4g、6が0.3g、7が0.8gである。

### ○二次加工のある剥片(第6図8~11)

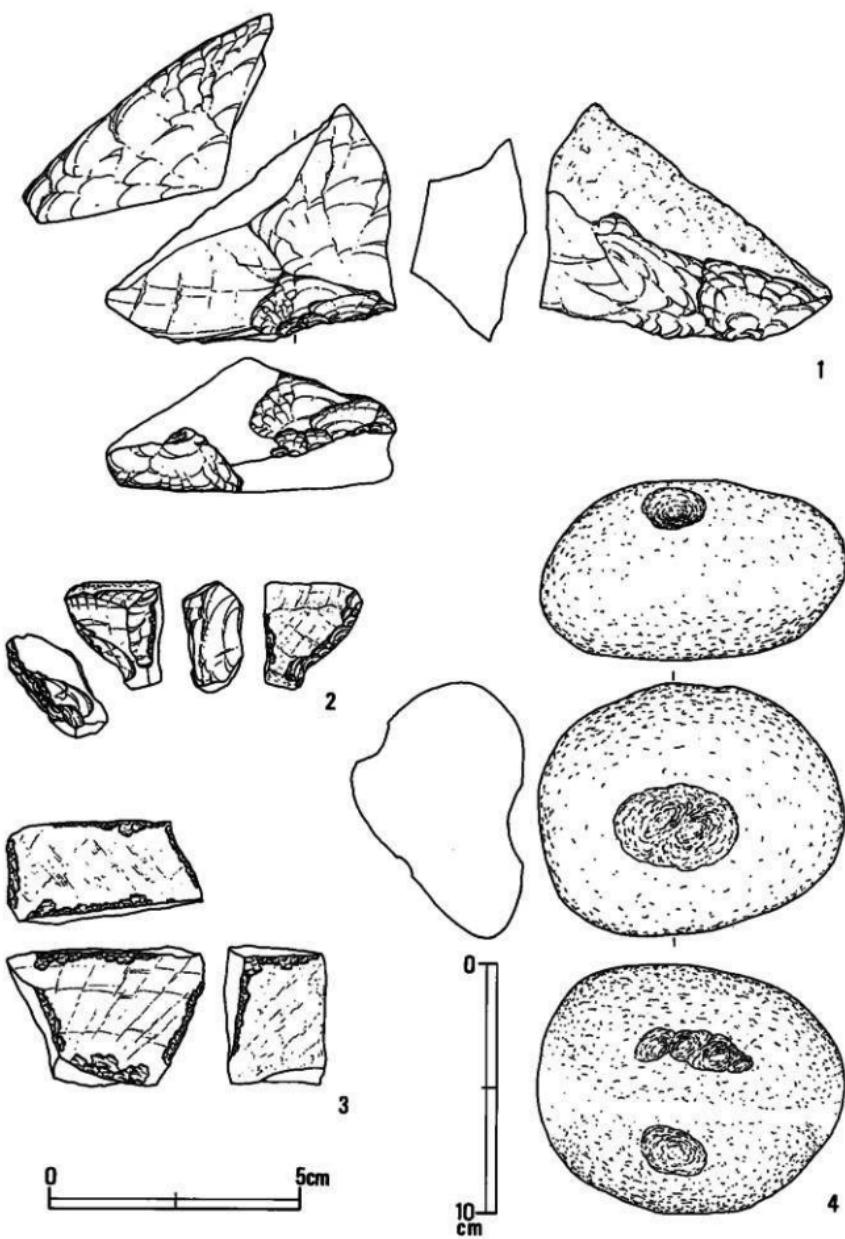
8はメノウの小剥片の両縁部に抉り加工を行ったものである。加工は正面側(素材背面側)が比較的急斜に、裏面側(素材腹面側)が平坦で、前面の小剥離はステップ状であるが、その背後の古い剥離は反対縁部に届くほど深い剥離のものが見られる。重さ1.2gである。9は抉り状の加工を施したもので、剥離は両面に施されている。図の正面が素材の背面であるが、素材を折断した折れ面を打面にして素材の打面側を切り取るような剥離が見られる。黒曜石製で、重さ1.4gである。10は素材の打面以外の三辺に二次加工が見られる。図正面が素材腹面で素材打瘤部を取り除くような剥離が素材打面側から成されている。正面左縁部は抉るような加工である。それに連続して素材端部に加工が見られ、弱い尖頭部を作り出している。正面右縁部の加工は鈍角の縁部で施されたもので、急斜な加工である。これも、黒曜石製で、重さ3.4gである。11は黒灰色の珪岩製である。図正面が素材腹面であるが、裏面の剥離も主剥離面と同時に破碎するように剥離した可能性がある。正面のみに加工が見られ、弱い抉り状の加工が2つ連続して弱い尖頭部を作り出している。重さ2.1gである。

### ○石核(第6図12・13)

12は両極打撃により剥離されたものである。図裏面の両極打撃に切られている古い大きな剥離はボジ面であるが、この折り同時に原石を分割するように剥離した剥離面である可能性がある。なお、正面左面に見られるように、この両極打撃以前にも剥離が成されていたらしい。黒曜石製で、重さ9.3gである。13は比較的大きな剥片を剥離したもので、特に正面の剥離に匹敵する大きさの剥片は出土していない。12のような両極打撃を行っても剥片を得ようとする



第6図 出土石器(1)



第7図 出土石器(2)

状況を思えば、まだまだ目的的な剥片の剥離が可能な石核である。この石核が単に破棄されたものではなく、この地点の回帰的な利用を念頭に置かれたもので、この地点がいわゆる「キャッシュ」であった可能性も考えられる。黒曜石製で、重さ25.9gである。なお、自然面はいわゆるズリ面で、河川で円磨されておらず、原産地の露頭から得たものと考えられる。

#### ○礫器(第7図1)

珪質頁岩の大型剥片の端部に数枚の剥離を両面に行い刃部を形成したものである。素材の端部はヒンジフラクチャーとなっており、鋭利な刃部を形成していない。その縁部を非常に粗く刃付けを行ったものである。なお、素材はいくつかに分割されるように剥離されたうえ、最終的に折られている。裏面に自然面が残るが、若干河川による円磨がみられるものの、横理面の状態を残しており、河川のかなり上流で得たものと思われる。重さが50.0gである。

#### ○打撃痕がある礫(第7図2・3)

2は珪岩の分割線を用いたもので、正面左縁部に激しい打撃痕が見られる。また、右縁部にも弱い打撃痕が見られる。重さ5.2gである。3は石英の分割線で長方体状に分割された各辺に打撃痕が見られる。12の辺のうち7辺に打撃痕が見られる。重さ30.9gである。いずれも火打ち石として用いられたのだろうか。丘の公園第3遺跡で珪岩製の同様なものが出土している(山梨県教委1987)。

#### ○くぼみ石(第7図4)

安山岩円錐の3つの平坦面にくぼみ面が1ヶ所ずつ、合計3ヶ所見られる。重さ335gである。

(保坂 康夫)

#### 【引用文献】

鈴木道之助 1983 「石器」「縄文文化の研究」7(道具と技術)

山梨県教委 1987 「丘の公園地内遺跡範囲確認調査(第1次)報告書」

山梨県教委 1989 「金生遺跡」

## 第4章 まとめ

今回の清里バイパス第2遺跡は、土器・石器が出土しているがいずれも遺構には伴っていない。まず、土器については、(第4図 出土土器)縄文早期中頃の山形押型文・楕円押型文の土器片や、それ以降と考えられる土器片などが出土している。また、石器(第6・7図 出土石器)などについては押型文期の鐵形縁や縄文晩期と考えられる凹基有茎縁・くぼみ石などが出土している。

本遺跡周辺には、旧石器から中世まで幅広く遺構・遺物が検出されているものの、そのほとんどが短期的なキャンプ的要素の高い遺跡の状況を示し、住居跡など安定したと思われる長期的な生活の痕跡は、「清里の森第1遺跡」などで確認されているのみである。本地域は山梨県内でもっとも高い標高に位置し、確認された遺跡はほとんどが遺物のみの出土である。また、本地域周辺の遺跡の特徴としては、縄文早期・中世位に位置づけられる「陥し穴」が数多くみられ、「清里バイパス第1遺跡」でも、縄文時代に属するものや、中世に位置づけると考えられているものが76基検出されている。

このように、清里バイパス第2遺跡も、住居跡などの居住したと思われる長期的な痕跡は確認できず、本遺跡周辺の高標高地域での生活や、周りの環境を生かした生活が認められることから、当時の人々に着目され、高度に活用されていたことは間違いないであろう。

#### 【引用文献】

山梨県教委 1989 「丘の公園第2遺跡」・「丘の公園地内遺跡範囲確認調査(第2次)」

# 図 版



清里バイパス遺跡(北から南)



清里バイパス遺跡(南から北)

第1区調査区近影



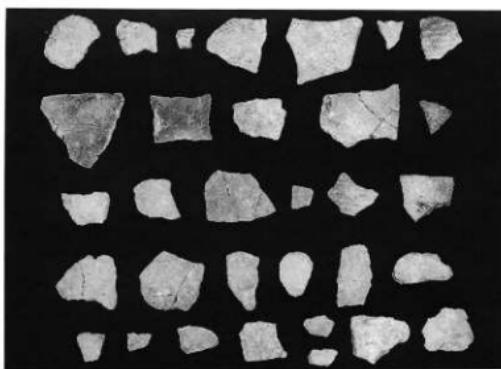
第2区調査区近影



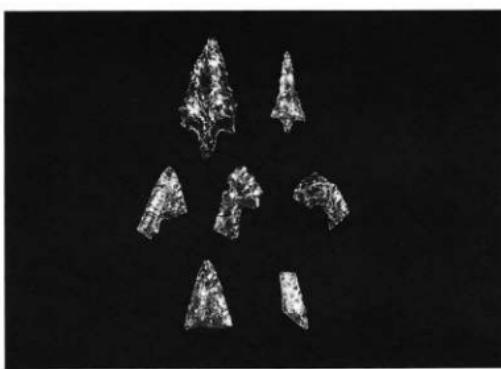
第2区遺物出土状況



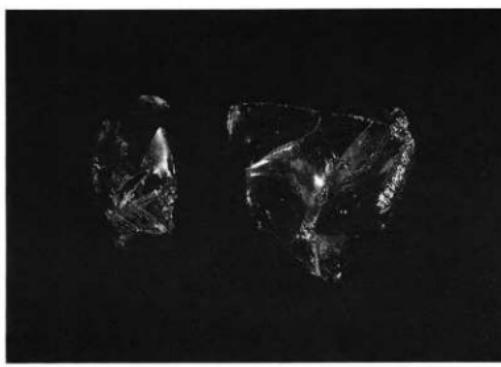
主な出土土器



黒曜石製石器



石核



報告書抄録

書 名	清里バイパス第1遺跡 清里バイパス第2遺跡						
副 書 名	主要地方道須玉・八ヶ岳公園線建設事業に伴う発掘調査報告書						
シリーズ名・集	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第124集						
著者氏名	坂本美夫・山本茂樹・高野玄明・川手昌英・雨宮芳夫						
発行者	山梨県教育委員会・山梨県道路公社						
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター						
所在地	〒400-15 山梨県東八代郡中道町下曾根923 TEL 0552-66-3016						
発行年月日	1997(平成9)年3月28日						
所 収 遺 跡 名	所 在 地	市長コード	遺跡番号	北 緯	東 經	調査面積	
清里バイパス第1遺跡	山梨県北巨摩郡高根町 清里3545-1			35° 55'	138° 27'	2,400m <sup>2</sup>	
清里バイパス第2遺跡	山梨県北巨摩郡高根町 清里3545			35° 54'	138° 26'	2,600m <sup>2</sup>	
所 収 遺 跡 名	種 別	主な時代	主な遺構・遺物	調査期間		調査原因	
清里バイパス第1遺跡	陥し穴	縄文時代	陥し穴(76基), 陥し穴基部杭	平成8年4月24日～			道路建設
		中世	縄文中期土器片, 石鎌	平成8年6月12日			
清里バイパス第2遺跡	散布地	縄文時代	縄文早期横円押型文, 山形文土器片, 有茎・鋸形石旗	平成8年7月29日～			道路建設
				平成8年9月19日			

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第124集

清里バイパス第一遺跡・清里バイパス第二遺跡

主要地方道須玉・八ヶ岳公園線建設事業に伴う発掘調査報告書

印刷日 1997年3月24日

発行日 1997年3月28日

編集 山梨県埋蔵文化財センター

山梨県道路公社

発行 山梨県教育委員会

印刷 横河グラフィックアーツ株式会社

